あなたの持っている本当の力

超越神力（ちょうえつじんりき）

PART―1 天耳通・他心通

麻原彰晃





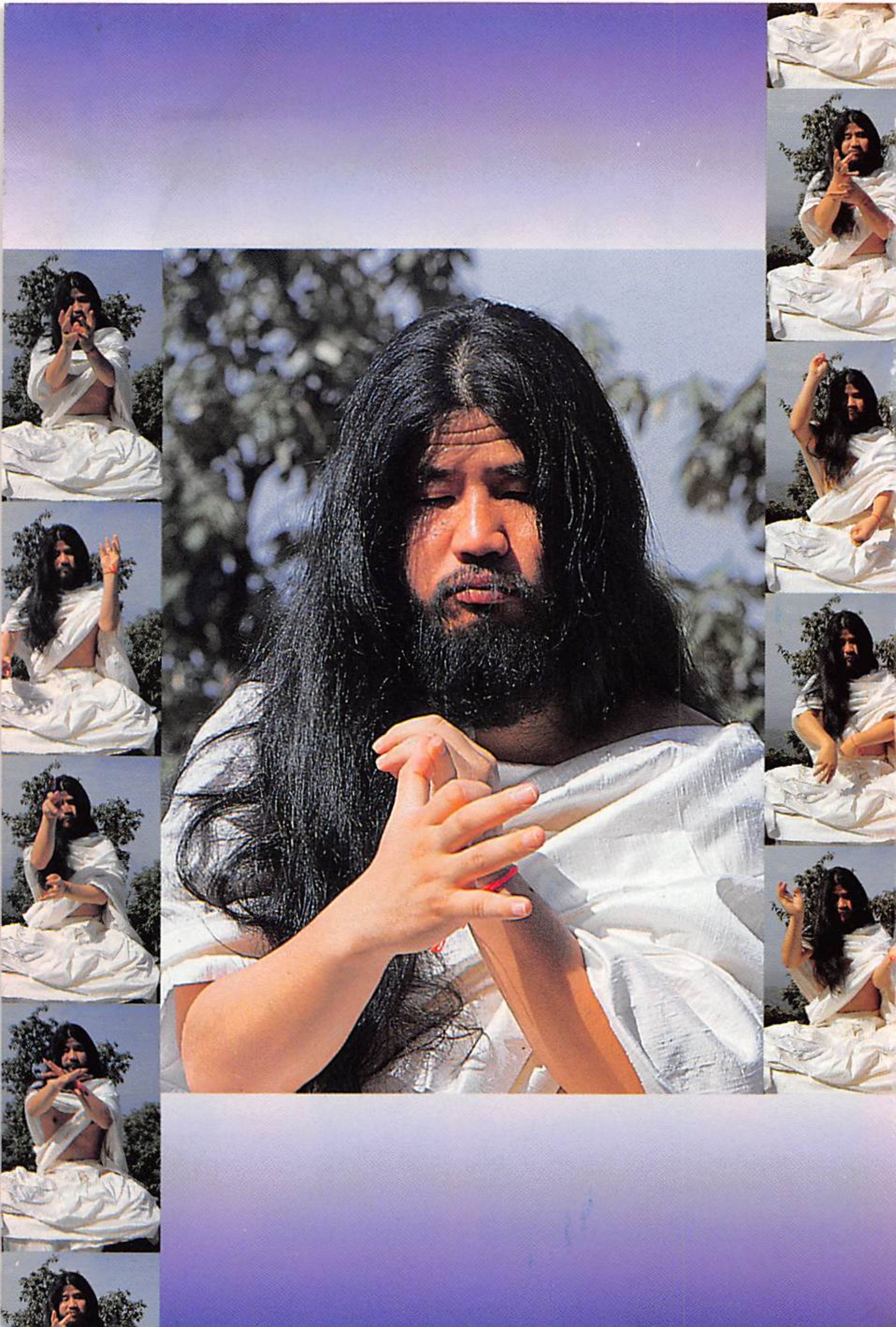
あなたの持っている本当の力

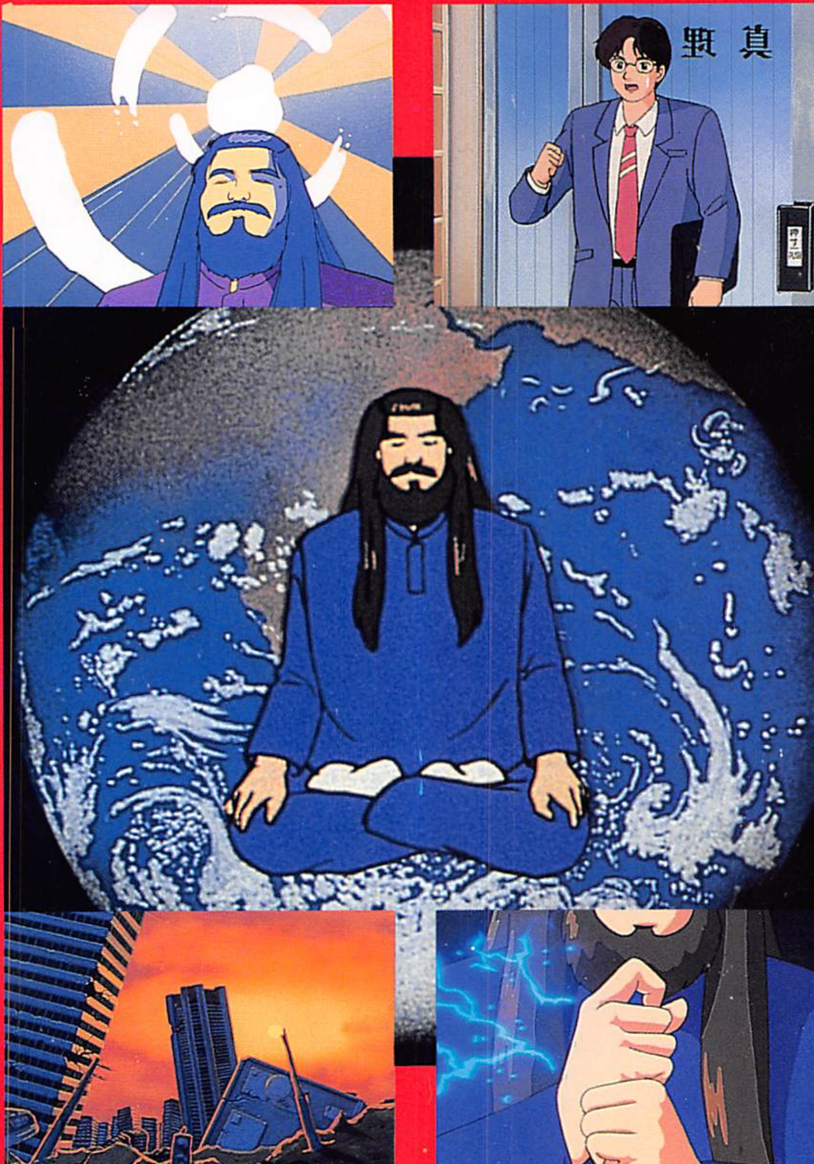
超越神力(ちょうえつじんりき)

麻原彰晃

PART―1
天耳通・他心通







アニメーション『超越神力』PART 1 （天耳通・他心通）より。本書を題材としたこのアニメーションは、出版に先駆けて、91年5月、7月に公開された。再上映の予定もある。
(© AUM MAT STUDIO 1991)

はじめに

わたしたちは、日常の生活において、いろいろな楽しみを経験している。しかし、同じ条件で経験した楽しみが以前と全く同じであることはあり得ない。それはなぜであろうか?

わたしたちの経験する能力は、いろいろなシチュエーションに対して味付けを行なっているからである。その味付けは大別して二つに分けることができる。一つは愛著（あいじゃく）であり、もう一つは憎しみである。この味付けによって楽しみが増大したり、楽しみが減少したりするのである。

根本的な原初の仏教やヨーガの教えは、この二元の考えを超越する教えである。今から二千五百年前、釈迦牟尼はこの二つの邪なる道を破壊し、中道をお説きになった。これが真の中道なのである。

そして、この中道は、わたしたちの中に眠っている素晴らしい力の源のスイッ

チを入れてくれるのである。この素晴らしい力こそが、人智をはるかに超えた力、「超越神力（ちょうえつじんりき）」であり、あなたが真の中道に目覚めたとき、あなたは神そのものになっているのである。

麻原彰晃

一九九一年八月一八日早朝



CONTENTS

超越神力

あなたの持っている本当の力

PART 1

天耳通
他心通

目次

CONTENTS

瞑想によって天耳界に入ることによって、
〝遠くや近くの音、また天界や人間界の声〟を聞く。
それは地球のどこにいても瞬間的に伝わってくる。

第一章 天耳通（てんにつう）

その一　実録「芦川君救出作戦」

なぜなら、天耳界というのはアストラル世界（異次元）の中の一つであって、
この特殊な空間を使って音や声が伝わってくるからである。
これを「天耳通」という。

◉突然の叫び

九〇年七月――

「助けてくれ――!」

瞑想中のわたしの耳に突如として聞こえてきた悲痛な叫び。芦川君の声だ。間違いない。一瞬ある種の不安がわたしの胸をよぎる。

わたしはすぐさま、天耳界(てんにかい)の神々にお伺いを立てた。

「芦川君の身に何か起こったのだろうか?」

時をおかずして神々の声が響く。

「救え、救え、救うんだ! まさに時期、これ以上家においておくと危険だ。救い出せ。」

「――それは、監禁されているということか?」

「そうだ。」

神々は答える。
「場所は家で間違いないか？」
「間違いない。」
「薬物は使われているのだろうか？」
「使われている。」
「ということは、薬物を使われていて、家の中で監禁状態にあるんだな。」
「そのとおりだ。あと一週間が限界だ。」
「これ以上家においておくと、彼の精神性が破壊されてしまう。何としてでも救い出せ。」
そうだったのか。監禁されていたのか。ちょうどそのとき、内弟子（オウム真理教の出家者）の一人であるジーヴァカ師がわたしのもとにやってきた。そして切り出したのである。
「尊師、芦川君のことなんですけども――。」

◉利他の心——優秀な菩薩

芦川君とは、東京大学医学部の学生である。オウム真理教内では、特に熱心な在家信徒として名を馳せており、自分自身が数多くのイニシエーション（秘儀伝授）を受け、また修行によって瞑想ステージを上げているというだけでなく、これまでに多くの人を真理に導いてもいた。

自らの悟りを求めて修行しつつ、利他の心を持って他人を救済する人を菩薩と呼ぶが、そういう意味でいったら、彼は大変優秀な菩薩道の修行者であったといえよう。

ところが、そんな彼が五月の初めに、

「出家するために両親と話し合ってくる。」

と言って実家へと向かったまま、ぷっつりと消息を断ってしまったのである。彼

の実家は徳島のある病院だということだった。

彼の宗教活動が活発であったがゆえに、わたしの多くの高弟たちも彼のことをよく知っていた。そして、まず高弟たちが芦川君からの連絡が途絶えてしまっていることを心配し始め、わたしに、

「芦川君は大丈夫でしょうか？」

というようなことを何回となく聞いてきたものである。

わたしは、彼らに対してこのように答えた。

「菩薩の修行を行ない、徳を積んでいる弟子は、グル（宗教上の指導者）との間に、あるいは神々との間に、特別な関係が成立する。これを現代密教では加持（かじ）という言葉を使い、わたしは守護という言葉を使うが、芦川の場合も、もし危険が存在したならば、神秘的な力によって必ずや守護されることだろう。心配はいらない。」

と。

しかしながら、わたしは五月の終わりごろになってから、芦川君の様子を神秘的な力によって透視している。やはり気にはなっていたのだろう。

わたしが透視したとき、彼は出家に対する意欲と、両親に対する情との板挟みで苦しんでいる状態だった。しかし、わたしはこんなことで前生からの修行者である芦川君の信と帰依が揺らぐことはあるまいと考え、そのまま放っておくことにした。できることなら、納得できるまで話し合いをさせてから出家させた方が、彼のためにもなる。

「行かなければよかったのに。」

と言う弟子もいたが、

「彼が納得するまでやらせたらいいじゃないか。」

と、わたしは言い続けていたのである。

◉彼は監禁されている！

そんなある日、わたしは一転して前述のような芦川君の助けを求める声と、「芦川君は監禁されている」という神々の声を聞いたのだ。

「尊師、芦川君のことなんですけれども、何かおかしいんですよ。」

「――うん。」

わたしは、先程の神々との会話を念頭に置きながら、ジーヴァカ師の話を聞いた。

彼は生理学者でもあり獣医の資格も持つということから、医学生である芦川君とは、かねてより親交があったのだ。そして、この日、ジーヴァカ師も芦川君のことが急に心配になり、わたしのもとにどうしたらよいかを聞きに来たのだという。

「芦川君が出家するために親を説得すると言って家に帰ってから二カ月経っているわけですが、今、全然連絡が取れない状態なんです。彼の友達も同じような状況で、みんなの話を総合すると、彼は監禁されているかもしれないんです。どう

しましょうか？」
「ジーヴァカ、芦川は間違いなく監禁されているぞ。」
わたしはゆっくりと口を開いた。
「わたしはたった今、瞑想中に神々からそのことを聞いたところだ。芦川も助けを求めている。」
「天耳通を使われたのですか？　尊師が神通力によってお知りになったのなら確実ですね。どうしましょうか？」
「そうだな。アパーヤージャハが道場にいるはずだから、彼と相談してみてくれ。」
「わかりました。やってみましょう。」
ジーヴァカ師は、そのままわたしの瞑想室のあるオウム・サティアンビルに隣接している富士山総本部道場へと向かった。そこでは、弁護士であるアパーヤージャハ師（現在は正悟師）が、祭壇横の片隅で、法律書と書類の山に埋もれて仕事をしているか、修行をしているはずであった。実は、このアパーヤージャハと

いうホーリー・ネーム（宗教名）を持つ彼こそが、オウム真理教の顧問弁護士として一躍有名になった青山吉伸弁護士その人だったのである。ちなみに、アパーヤージャハを日本語に直すとしたら、除悪趣菩薩ということになる。彼は早速調査に乗り出した。

◉異次元を超えて聞こえくる

さて、わたしが今回使った天耳通であるが、一般には馴染みのない言葉であろうと思われるので説明を加えておく。これは修行によって身につく神通力（超能力）の一つである。

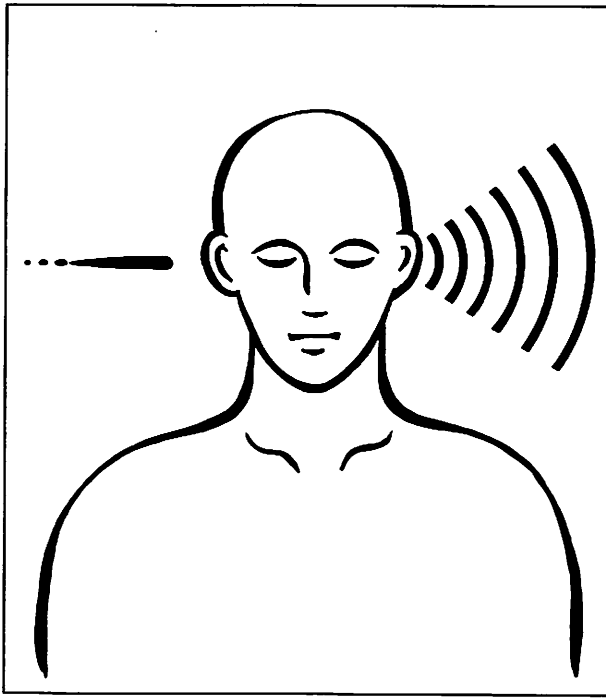
原始仏典に属する『南伝大蔵経』には、こう記されている。

「このように、向煩悩滅尽多学男が四つの如意の基礎を修習し、真面目に行なうならば、様々な種類の如意を経験する。…（中略）…このように、向煩悩滅尽多

学男が四つの如意の基礎を修習し、真面目に行なうならば、清浄であって人間を超越した天耳界において、神々や人々、あるいは遠くや近くの双方の音声を聞くのである。」(『相応部経典』「如意の基礎相応(十二)」より)

瞑想によって天耳界に入ることによって、〝遠くや近くの音、また天界や人間界の声〟を聞くことができるのだ。その声や音は地球のどこへいようとも瞬間に伝わってくる。なぜなら、天耳界というのはアストラル世界の中の一つであって、この特殊な空間を使って音や声が伝わってくるからである。

天耳通



天耳通は、天耳界という空間を使った神通力である。その声や音は、
地球のどこへいようとも瞬間的に伝わってくる。

◉訃報――前生の師の入滅

天耳通に関していえば、かつてこういうこともあった。既に『マハーヤーナ』NO23にその内容を紹介してあるので、そこから引用させていただこう。

紛れもなくカール・リンポチェ師のものであった。その声を聞いた瞬間、わたしは、

――トージェ・チェ（ありがとう）――どこからともなく響いてきたこの声は、

（カール・リンポチェが別れのあいさつをしにやってきた）

と感じ取ったのである。それは五月七日の朝方、瞑想中の出来事であった。

（リンポチェは亡くなったのか!?）

わたしはもっと正確にそれを確かめるべく、再び瞑想に入った。瞑想の力によって自分自身で確かめるより他はない。なぜなら、日本―インド間の国際電話事

情は非常に悪く、特にリンポチェ師の住んでおられたような田舎とでは連絡の取りようがないからである。

瞑想に入ったわたしは、神々に聞く。

「リンポチェは亡くなったのですか?」

すると、

——リンポチェは死んだ、死んだ、死んだ——

さんざめくような神々の声が聞こえてきて、わたしの質問に答えたのであった。

(中略)

瞑想中のわたしに別れを告げにいらしたリンポチェ師、そしてわたしの問いに対する神々の答え……。リンポチェ師が既に入滅されたか、あるいは非常に入滅に近い状態であることは間違いないであろう。わたしは直ちにインドへと出発することにした。

リンポチェ師との今生最後の別れとなるのであるからと——もちろん、これは

わたしの瞑想が正しいものであったらであるが――わたしは十五人の大師と三人のシッシャ（オウム真理教の出家修行者。内弟子。現在はサマナ）、そしてわたしの子供たちを連れていくことにした。その中には四月に生まれたばかりの識華も含めた。生後一カ月の赤ちゃんを、真夏のインドへ連れていくなどということは、普通に考えたらまさに気違い沙汰ではあろうが、識華を連れていった方がリンポチェも喜ばれるだろうと考えたからである。

（中略）

「あなたが来てくださって、とてもうれしく思います。リンポチェは、既に二、三カ月前に、自分の寿命が長くないことを知り、わたしにそのことを話していました。

『わたしはもうじき逝くであろう。』

と。

――信じられませんでした。なぜなら、わたしの目には、彼が本当に普段と変

わりなく映り、体の状態もそう悪くは見えなかったからです。」

夜遅くなってソナダへ到着したわたしに、リンポチェ師の住居の中の一室で、リンポチェ師の甥でもあり秘書でもあったラマ・ギャルツェンは話し出した。憔悴し切った様子であった。

「しかし、この十日にリンポチェは亡くなったのです。ご自分で予言されていたとおりに……。」

十日にリンポチェは入滅された！　十日といえば、わたしがヴィジョンを見た三日後であり、インドへと出発する前日だ。入滅されてから、今日で四日経ったということになる。

「わたしはすぐに、あなたあてに国際電報を打ちましたが、電報をご覧になってすぐ日本を発たれたのですか？——それにしても……。」

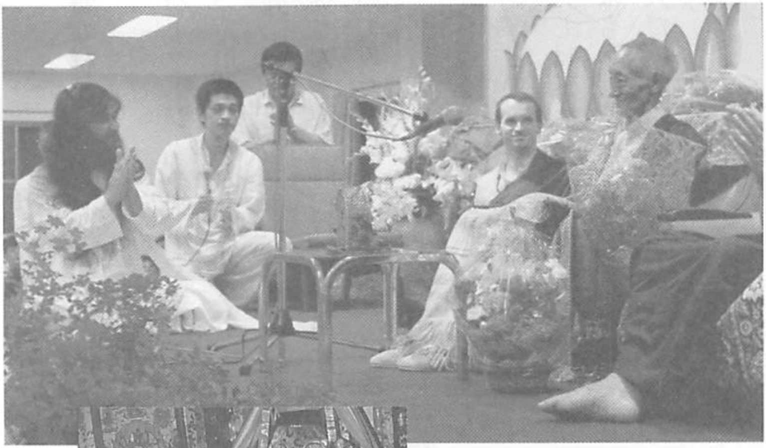
わたしがソナダに到着した時点では、外国からの弔問客はだれ一人到着してい

なかった。訃報を受け取ってからビザを取得し、様々な準備をして、しかもこれだけの大人数でやってくるにしては、当然早すぎるとでも思ったのだろう。秘書は不思議だというような顔をした。そこで、わたしはこれまでの経過を説明したのだった。

まず、瞑想中のヴィジョンにリンポチェ師が現われ、「トージェ・チェ」と言うとともに、わたしに別れを告げたこと、神々に聞いても「リンポチェは死んだ」と答えたこと、そのため、慌ててインドへとやってきたこと——。話しながら、わたしは、わたしに「トージェ・チェ」というチベット語を教えてくれたのが、他ならぬリンポチェ師であられたことを思い出していたのだった。

このように、天耳界において伝わる音声は大変正確なものなのである。修行によってある程度のステージに到達した修行者にとって、空耳なんてことは決してあり得ない。わたしは芦川君を何としてでも救い出さなければならない、と思った。

天耳通







尊師の一つの前生の師である、チベット仏教カギュ派の故カール・リンポチェ師。８８年７月、瞑想中に登場したリンポチェ師を追って、尊師は香港を訪ねられ、劇的な"再会"が実現した。８９年５月、天耳通でリンポチェ師の入滅を知られた尊師は、だれよりも早く弔問に駆けつけられたのであった。

◉不審な様子

アパーヤージャハ師がやってきた。ジーヴァカ師も一緒だ。既に東京本部において、芦川君の友人たちから事情を聞いたらしく、その報告がなされた。

「調査してみたんですが、やはりおかしいようです。芦川君と同じ、東大医学部の信徒さん、東大時代に芦川君をよく知っていたというサマナとか、何人かに話を聞いてみたんですけれども、母親がブロックすると言うんですね、電話連絡も。ええ、居留守を使ったりして。母親は『伝えておきます』と言うのですが、結局本人からは連絡が入ってこないんです。どうもおかしいんだけれども、よくわからない、というところです。」

わたしは二人に、明日徳島に飛んで、直接あたってみるように、と指示した。監禁はもう間違いないのだから。

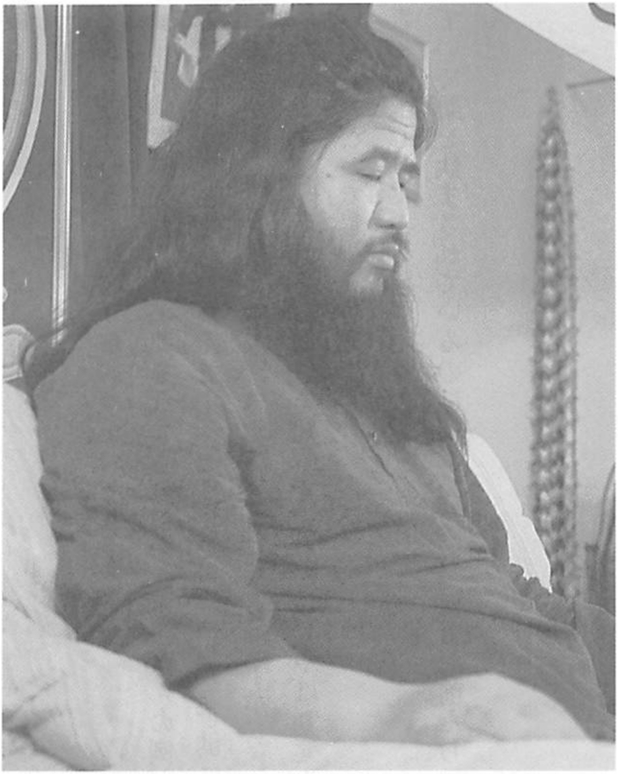
「二人だけでいいですか？」

と、帰り際にジーヴァカ師が聞いたので、わたしは答えた。
「ヴァジラティッサも連れていった方がいい。薬を飲まされて肉体的に異常が出ているだろうから。」
と。あくまでもわたしは自分の得た天耳界の情報を信じていたのである。このヴァジラティッサ師は、芦川君とも親しい医師なのであった。

◉救出作戦開始!

芦川君救出作戦開始! 彼らは徳島へと飛ぶ。芦川君の実家である医院を訪ねた後、第一報が入る。アパーヤージャハ師だ。
「やっぱり、ちょっと様子がおかしいですね。母親は何か動揺した雰囲気だったし、父親の方は怒りまくっていました。」
他の二人にも印象を聞いてみる。二人も同じようなことを言う。が、確信がない、

というところで、皆引っかかってしまっている。第一、母親は信徒なのだ。
「必ず監禁されているんだから、もう一度行ってみてくれ。お前たちはだまされているぞ。母親がグルになっているんだ。」
とにかく彼らに突き進ませるしかない。わたしの直感と透視、そして血液型分析からすると、母親が嘘をついていることが明白なのだ。たとえ彼女がオウム真理教の信徒になっているといっても。
しかしながら、その日の午後、もう一度医院を訪ねた彼らからの報告は、はかばかしくないものであった。父親は打って変わって非常に冷静になっており、母親の方もとても柔らかい応対をしたというのである。三人とも、
「何となくおかしいけれども、ああいう応対をされると、ますます確信がなくなっていく。」
と言うのだ。ヴァジラティッサ師など、
「何か隠している様子はある。しかし、薬は飲ませていないと思います。」



確信が持てないという３人。しかし、尊師には絶対の確信があった。

と自分の印象を語る。
「なぜだ？」
と聞くと、父親とこういうやり取りがあったのだという。
「わたしが『精神病院へ入れられて薬を飲まされていた平松さんの例があるから心配している』ということを言ったんです。そうしたら、『親が子供にそんなことをすると思いますか？ 血を分けた子供に、そんなことするはずがありませんよ』と言われていたんです。医者は薬の怖さを知っているから、やはり薬を使うなんてことはないんじゃないでしょうか？」
　わたしはため息混じりにこう言ったものだ。
「監禁されていて薬を飲まされているのは間違いない。何でお前たちはそんなふうに考えるんだ？」
と。

◉一か八か——人身保護請求

その後、彼らは方向を変えて精神病院をあたったりしていたが、らちがあかない。わたしはメンバーに外報部長のマイトレーヤ正悟師（せいごし）を加え、人身保護請求という法的手続きを取るという線で押させることにした。まだ出家していない信徒に対して、正悟師まで動員して救出作戦を展開するなどということは、かつてなかったことである。これも芦川君の出家修行に対する強い願いと、彼の功徳（くどく）のなせる業なのだろう。

ちなみに、オウム真理教の正悟師とは、マハー・ムドラーという大変高いレベルのヨーガの成就を成し遂げた修行者に対する称号である。このマハー・ムドラーの成就に至って初めて人は個の完成を得、絶対自由・絶対幸福の境地を手に入れることができるのだ。

それにしても、人身保護請求を出すということは、弁護士であるアパーヤージャ

ハ師にとって、かなりの決心を要したのではないかと思う。友人などが連絡をしても連絡がつかないというだけで、監禁を証明する直接的な証拠が何一つなかったからだ。

「もちろん推測は成り立つので違法な訴えというわけでもないですけど……失敗したら非常に恥をかくというか……そういうケースだった。」

と、後に彼は言っていたが、まさにそのとおり。彼はわたしの神通力を信じて一か八かという行動に出てくれたのであった。

人身保護請求を出す前に、彼らはもう一度芦川君の実家へと寄っている。そのときの父親は非常に取り乱していたという。

「いきなり来るとは何だ。患者が死にかかっているんだぞ。」

と言ってみたり、

「わたしはここの医師会の副会長をやっているけれども、それをやめて、病院も閉めて、すべて整理して〝被害者の会〟に入ってオウムと闘います。横浜弁護士

会とも連絡を取ります。」

と言ってみたり。徳島地方裁判所に芦川君の人身保護請求が出されたのは、その日、七月二十七日のことだった。

〝被害者の会〟というのは、オウム真理教に出家した子供（とはいっても成人である）を持ち、しかもそのことでオウム真理教に悪感情を持っている親や祖父母の集まりである。様々な理に合わない活動によってオウム真理教の布教活動や修行を邪魔しているので、当方ではこれを〝加害者の会〟と呼んでいる。

また、横浜弁護士会も似たようなことをしている団体である。が、〝加害者の会〟にしろ横浜弁護士会にしろ、その実態を明らかにするために本書の紙面を割くということは、著しくその品位を落としてしまうような気がするので、わたしはここではあえて書かないことにする（言いたいことはいっぱいあるが）。

◉監禁されてなかった?

さて、この芦川君救出作戦、人身保護請求を出してから急転直下、解決へと向かった。裁判所から芦川君本人の呼び出しがあった日、わたしは彼が親に連れられて弁護士のところへ寄るはずだとにらみ、マイトレーヤ正悟師らを弁護士事務所前で待たせることにした。そして、うまく芦川君と接触することに成功した。というより、ビルの二階からメンバーの一人を見つけた芦川君が自分から道路へと出てきたのだった。彼はこれまでのいきさつを話した。

「父が僕が出家するなら〝被害者の会〟へ入ると言っていたので、そうさせたくなかった。何とか説得したかったんです。」

「君のやり方は間違っているよ。父親が〝被害者の会〟に入ろうが、そんなことは構わないじゃないか。大切なのは君の修行だろう?」

マイトレーヤ正悟師のこの言葉に、芦川君はハッとしたらしい。

審尋が始まり、
「出家の意思はありますか？」
と問う裁判官に、芦川君は、
「はい、わたしは、今直ちにオウム真理教に出家したいと思います。」
と、きっぱりと言い切った。そして、事の進展のあまりの速さにあ然としている両親を後にして、本格的な出家修行の道へと入っていったのだった。
彼は、徳島の実家にずっといたのだと言った。で、どういう生活をしていたのかということになると、
「ずうっと、横になっている状態でした。動けないというか、呆けちゃって、愚鈍になっちゃってました。」
と言いながら、顔をしかめる。
（本人が気付かないうちに薬を飲ませ、その薬の作用を利用して、やんわりと監禁状態にもっていったのではなかろうか？　これも本人の自覚のないうちに――。）

◉父親が息子に薬物を！

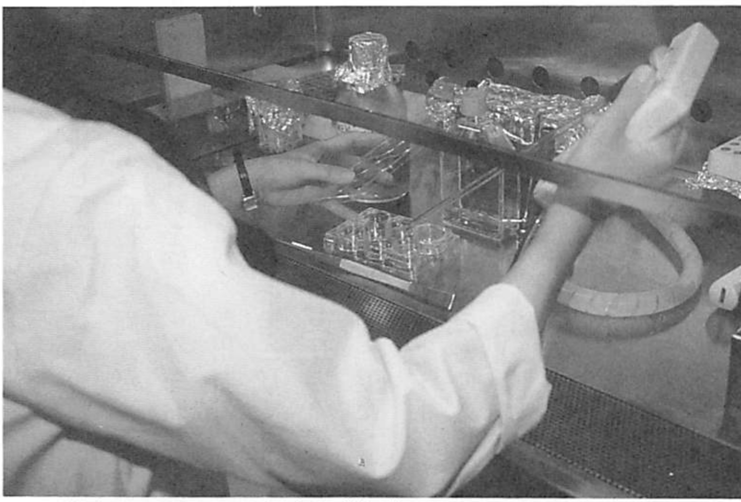
早速、ヴァジラティッサ師が診察をする。五キロもの体重増加、異常な喉の渇き、そしてろれつが回らない——師も薬を疑った。信徒の医師に相談すると、

「可能性としてはあり得ますね。調べてみましょう。」

と言って、芦川君の血液検査を自分の勤務する大学病院に頼んでくれた。すると、ガスクロマトグラフィーでの検査で、二回ともクロルプロマジンが検出されたのである。これは、重度の精神分裂病などに用いる、かなり強い薬であるということだった。

また、併せて行なった肝機能検査では、肝細胞がどれだけ壊れているかを示す指標であるGOT、GPTが共に中程度の上昇をしていた。薬の影響で肝障害を起こしていたのだ。この値は入院が必要なほどのものであるという。

本人によると、ある時期になって意識が戻ってきたように感じたのだというが、



血液検査の結果は"クロ"。父親が息子に劇薬を使っていたという驚くべき事実が判明した！

その時期が、オウム側の両親に対してのアプローチが始まったときと一致していた。おそらく、事のなりゆきに不安を抱いた両親が、その時点で薬の投与を中止したのだろう。それからかなりの日数を経て、今なお薬が検出されるとは——。そして肝障害が見られるとは——。やはり、芦川君の助けを求める声を聞いた瞬間から、確信を持って救出へ向けての行動を起こしていてよかったと言わざるを得ない。もし、あのときひるんでいたなら、天耳界の神々の言葉どおり、彼の精神は破壊されてしまったに違いない。まさに間一髪だった、と思う。

それにしても、医者である父親が、薬の危険性に目をつぶってまで息子にクロルプロマジンを投与するとは、一体どういうことであろうか? 芦川君によると、父親は自分の果たせなかった夢を息子に託していたという。すなわち、東大医学部を卒業した後も大学に残り、そのままプロフェッサーとしての道を歩んでほしいと——。そして、そのように彼を育ててきたのだ。

ところが、灘高へ入学し、初めて親元を離れた彼は、人間にはいろいろな生き

方があるのだ、ということを知り、自分の人生に疑問を感じ始めたのである。そして、そんな中で、エゴイスティックな生き方は、結局自分の苦しみにつながるということに気付き、精神世界へとひかれていったのだという。

——成長した小鳥はいつか巣を飛び立つのだ。いつまでも親鳥のものではあり得ない。このことを芦川君のご両親が悟ってくれたらいいのに、と思う。

彼は今、健康を取り戻し、修行とワークに励んでいる。

さて、オウム真理教の修行体系に従って修行しているわたしの弟子たちも、順調に今回ご紹介した天耳通を身につけていっているので、その体験をお読みいただきたい。この神通力が何も特別なものではなく、正しい修行さえしていくのならだれにでも身についていくものであるということがご理解いただけよう。

◉ヤソーダラー正大師の体験——不思議な声のアドバイス

さて、その日は結局「行ってこい」という尊師のご指示に（素直に）従って、五人のサマナと話しました。みんな還俗を考えているくらい現世への執着の強い人たちでした。

帰ってから、その報告のために尊師の瞑想室に入った途端、果たして、

「何だ、エネルギーが真っ黒になってしまったじゃないか！」

との声が飛んできました。とても報告どころではありません。

「すぐに究竟（きゅうきょう）の瞑想に入れ。そして、どこから漏れて、どこからカルマを受けたか考えてみろ！」

と、あっけなく瞑想室から出されてしまいました。

（困ったなあ。）

わたしには、瞑想したってそんなことわからないように思えました。それでも、



尊師はどういう答えを出したのかお聞きになることでしょう。仕方ないので、とりあえず瞑想に入ってみました。

数十分後、意識が肉体に戻りかけたときのことです。どこからともなく、不思議な声が聞こえてきました。その声は、はっきりと、

「喉から漏れて、マニプーラから低いカルマが入って積もり重なった。」

と言ったのです。わたしはびっくりして目を開けました。意識は鮮明になり、エネルギーは回復していました。すっきりとした気分です。

(今の声は何だったんだろう。尊師の出された課題の答えだったんだろうか？ それは正しいのだろうか？)

早速、尊師の所へ行ってみると、

「どうした？ 瞑想していたんじゃないのか？」

と言われましたが、すぐに、

「エネルギーがすっかり回復しているじゃないか。」

と、エネルギー状態の変化に気付かれました。

わたしは、究竟の瞑想で短時間に回復したこと、そして不思議な声のことを話しました。すると、

「そうだ、喉から漏れるんだ！　だからこそ、少ない言葉で、いかに相手に影響を与えるかが大切になってくるんだよ。」

と、よくやった、というような声の調子で言ってくださったのでした。また、マニプーラ・チァクラ（へそに位置する霊的センター）でカルマを受けたという方も、まさにそのとおりだったのです。

「マハー・マーヤ（ヤソーダラー正大師の以前のホーリー・ネーム）はシヴァ大神の祝福を受けているから、教えてくださったのはシヴァ大神だったんじゃないかな。」

という尊師のお言葉に、本当にシヴァ大神だったらうれしい、と思ったものでした。

その後、この不思議な声のアドバイスを、わたしは忘れることはありませんでした。このことに気を付けることによって、わたしは自分の状態をキープしやすくなりました。確かに言葉が多ければ多いほど、時間が長ければ長いほど、エネルギー状態は悪くなり、判断力も鈍ってきてしまいます。これでは決して相手のためにもなりません。

――やはり、瞑想すればするだけステージは上がってゆくものなのですね。このように天耳界において適切なアドバイスを受けることができたのは良い経験でした。

（中略）

わたしは、以前尊師に瞑想の状態を聞かれたとき、

「今日は雑念が多かったみたいです。瞑想中（周囲が静かであったにもかかわらず）いろいろな声が聞こえてきました。」

と答え、

「何もわからないで勝手な解釈をするんじゃない！」

と怒鳴られたことがあったのですが、このころから瞑想中に天耳界へと入ることができるようになったのかもしれません。それまでにもレベルの低い天耳通はあったのですが……。

（ヤソーダラー正大師「瞑想——神通力」『マハーヤーナ』NO39より）

第一章 天耳通（てんにつう）

その二

アストラル世界から神秘の声が！
「体験！——天耳通」



マハー・ケイマ

Mahā・Khemā

危機一髪！ 尊師の示唆

わたしはよく、アストラルにて悪魔に攻撃をしかけられるのですが、そのときわたしがどうしたらよいだろうか、と思ったり、尊師に助けを求めたりすると必ず、これこれのマントラを唱えたらよい、とか、蓮華座を組んでこれこれの瞑想をしなさい、というような示唆があります。

つい先日、七人の悪魔（たぶん黒魔術の使い魔）がわたしにおどしをかけてきました。初めに現われたのは、黒いシルクハットをかぶって、黒装束に身を包み、ステッキを持った背の低い使い魔でした。次に二人三人と、それぞれ個性あふれ

る格好をした者が、現われては消え現われては消え、彼らはわたしをおどすために、七人全員がひと通り姿を見せた後に、アストラルの空間を剣とヤリでいっぱいにしました。

その後、一瞬のうちに剣とヤリを一つ残らず消し去り、七人の使い魔が勢ぞろいし、わたしに向かってニヤッと笑いました。

わたしはそこで、釈迦牟尼の弟子のケーマー・ビックニーの詞章を思い出し、

「悪魔よ立ち去れ！」

と言おうと思ったのですが、どうも、このカルマの悪い使い魔にはあまり有効でない気がして、どうしたものかと考えて尊師を観想し、尊師のお名前を唱えたところ、

「この場合は、『大乗の発願』（オウム真理教で唱えられているマントラの一つ）が一番良い。『大乗の発願』を唱えなさい。」

という声が聞こえてきました。

そこで、座法を組み、『大乗の発願』を心を込めて唱え出すと、使い魔たちはあわてふためいて（たぶん『大乗の発願』は彼らにとって最も苦手な高次元のヴァイブレーションだったのでしょう）、わたしに詞章を唱えさせまいと、猛烈なエネルギーを加えてきました。

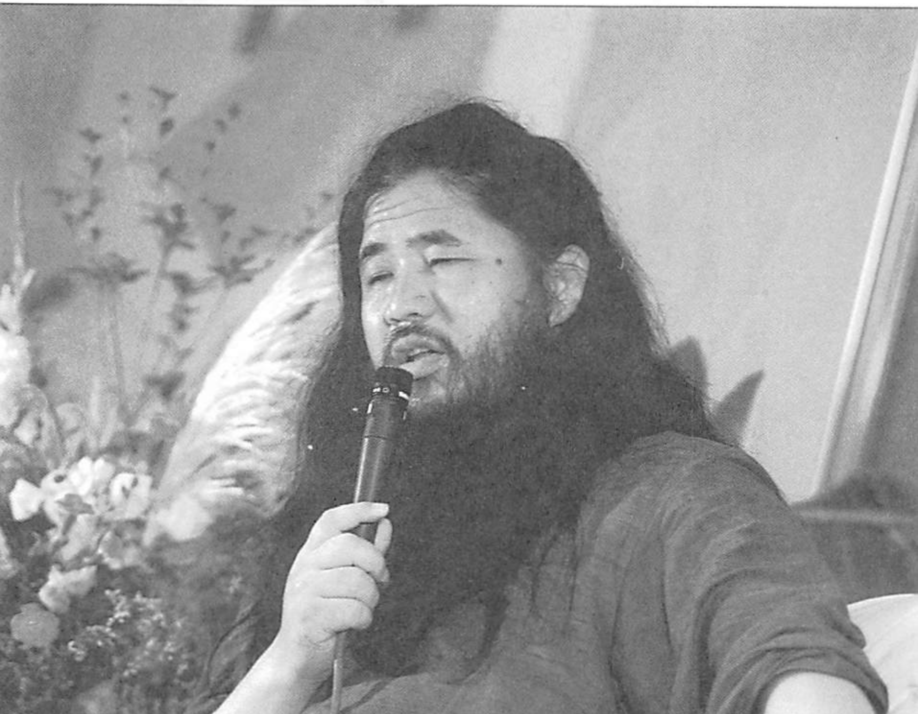
わたしは、彼らのエネルギーの圧迫によって気が遠くなりそうになりましたが、

「決してここでやめてはならない！」

と思って唱え続けると、ほどなく彼らは退散していきました。

このように、アストラル世界にていただくグルと神々の示唆は、そのときどきに最も有効なものです。この他にも魔のエネルギーから身を守るために帰依マントラやオウムのマントラなどをアストラルにていただいたことも何度かあります。

体験！——天耳通





ソーナー　*Sonā*

①いつも見守ってくださる尊師

まだ、わたしが信徒のころ、集中セミナーに参加させていただいたときの体験です。

当時、わたしの家族は、悪意のある他人の言葉を信じ、わたしが修行することに反対していました。今までどんなときでも理解を示していてくれた両親や兄たちは、わたしがまだその真理について模索中にもかかわらず反対するのです。宗教上の偏見とわたしに対する愛情とわかっていても、わたしの言葉よりも他人を信じ観念的に否定され、わたしは、家族に対して深く失望していました。

おまけに、尊師がおかけになったマハー・ムドラー（グルが弟子に対して用いるタントラ・ヴァジラヤーナの技法の一つ。本人の気付かない煩悩を顕現化させ、それによって、弟子の修行は著しく進み、後に大きな心の解放がもたらされるという高度なテクニックである）によって、本当にささいなことで嫉妬や闘争心や抑圧された汚い心が表面に現われ心が乱れてしまいました。

あまりにもつらいので散歩に出かけたわたしは、目に映る紫色のあじさいの中で、この世の無常を知りました。自分はなんて汚い人間で本当に自分を愛してくれる人などだれもいないのではないか。カルマとはいえ、あまりの孤独感に絶望してしまいました。

そして、しばらく歩んでいると目の前にがけの崩れた場所があり、

「このまま行けば、落ちて死ぬだろう。」

それを冷静に受け止めながら、最後の一歩を踏み出そうとしたとき、大変強い声で、

「止まれ。」

という声が聞こえてきました。その声は、絶対前には進ませないという強い意志を持ったお声でした。

それでもなお躊躇していると、この世の優しさには比べものにならないほどの慈愛のこもった声で、

「もういいから帰ってきなさい。」

と言いました。

まるで、凍った氷の像を溶かすようなその温かさは、素直な子供のようにわたしを元来た道へと引き返させるのでした。

そして、戻ってくると残り火を前に、尊師が一人の弟子と話をしていらっしゃいました。なぜか、そこにおいでになるのは不思議でした。それにわたしが戻ってきたのを確認されたかのように、わたしに聞こえるように、

「どれ、それでは休もうか。」

と言われ、お休みになられたのです。

尊師は、わたしが帰ってくるのをずーっと冷え込む朝方まで待っていてくださったのでしょう。言葉での会話は何一つありませんでしたが、弟子の危険な状態を察知して止めてくださったのはグルであり、戻ってくるように言われたのもグルであることは間違いありません。事実、数日経ってからそのことについて尊師から指摘されました。

わたしは、グルと弟子の関係ということを本で知っていましたが、この現象界をはるか超越した世界であるということを、このとき実感として理解できました。

②最高のものをあげよう

クンダリニー・ヨーガを成就する前のことです。東京本部の二階道場の祭壇には、シヴァ大神の絵が飾られているのですが、それを見ていたとき、突然綺麗な光に包まれました。その光の中で、

「お前に最高のものをあげよう。」

という清らかな声が聞こえてきました。それは、耳から聞こえるというのではなく、もう一つの内側の世界の耳が聞いているという感じです。

わたしにとって、〝最高のもの〟とは、もちろん解脱・悟りしかありません。こんなにも早くわたしに訪れるのだろうかと思いましたが、夕方には現象化し、尊師より極厳修行（オウム真理教で、解脱・悟りを得るための集中的な修行のこと）をするようにとのご指示がありました。



至福へのいざない

ヴィサーカー　*Visākhā*

会社勤めをしていた頃、転勤のお話があり、転勤先の上司と電話で会話中のとき、ふっと天の声というのか自分の内側からの声というのか、

「修行のため出家するから転勤はできない。」

という声を聞きましたが、そのときは自分でもよくわかりませんでした。なぜならば、仕事も順調でしたし、出家しようとは思っていなかったからです。

しかし、柿が熟すように、その後修行のために出家し、今は高い成就を目指して頑張っております。

後から振り返ってみますと、あのまま会社勤めをしていたら、今の自分ほど心の浄化もできず、クンダリニー・ヨーガの成就もできずに悩みの多い人生を送っていたのではないかと思います。

真理の流れの中に入って真理の実践ができることに深い幸福を感じる今、早くより高い世界へアプローチできるようになりたいと思います。



ヴァジラティッサ

Vajra Tissa

犬の言葉がわかった

わたしが入信した直後のことなんですけれども、他の人が連れていた犬を見てたんです。すると、犬がね、スススとじゃれついたんですね、主人に。そのときにね、パッと声が聞こえてきたんですよ。

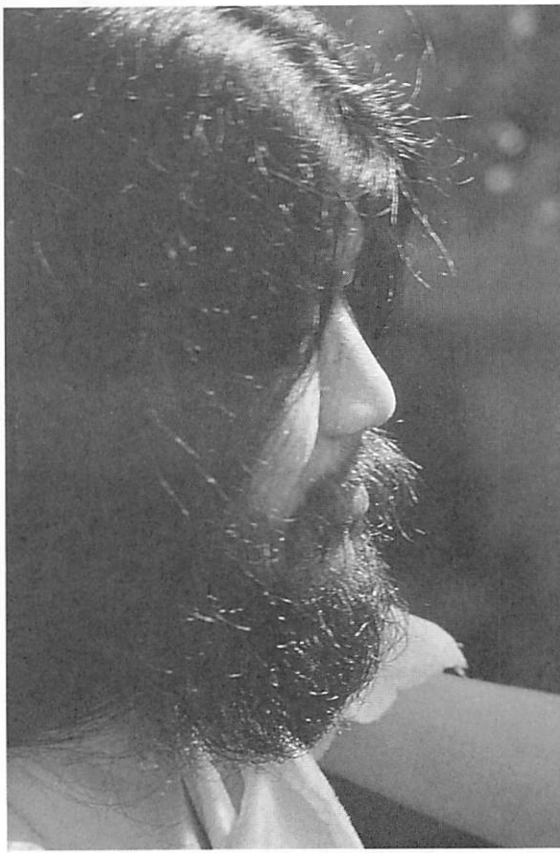
「ご主人様、好きです。」

とか言って。それで犬がじゃれついているんです。

(あれ、どっから聞こえてきたのかな。)

と思って、辺りを見渡してもだれもいないし、変だなと思ったんですけれども……。

やっぱりあれ、犬の言葉なんだろうなと思いました。なぜって犬がほえてたことは確かなんですよ。で、主人にじゃれつくと同時にそういう言葉が耳の中に響いてきたんですから。「へえ」とか思いましたけどね。でも、確かに声が聞こえたんですよ。
「ご主人様、好きです。」
という言葉が。あれは不思議でしたね。





ラーシャー　*Rāsiyā*

未来への警告

阿蘇のシャンバラ精舎で「立位礼拝」という修行中のこと。アイマスクをして礼拝をしていたわたしは、右側の後ろの方から人の近付いてくる気配を感じた。それは、スーッと近付いて、わたしの横で止まり、右耳の後ろ辺りで声がした。
「東京でエネルギーが足りないから、ダルドリー（空中浮揚の前段階で起こる超能力で、体が跳びはねる現象）を起こさないように。」
そう言うと、またスーッと後方へ去ってしまった。
わたしはあわててアイマスクを取り、周りを見回したが、いつもと何の変化も

なく、声の主らしき人物はいなかった。その声は若い女の人のものとわたしは感じた。

わたしは言葉の意図するところがわからなかった。そのとき、極厳修行は富士と阿蘇でしか行なわれていなかったし、なぜ東京なのかと考えた。そして、「もしかして、尊師ご自身のエネルギーが足りなくなるということなのかな。」と考えてしまい、否定的なことだとあわてて打ち消した。

しかし、その後、オウム真理教はまたもや悪質なマスコミの誹謗中傷に遭い、もしかしたらあのときの言葉はこのことを指し、わたしに大切な尊師のエネルギーを軽んじて無駄にしないようにという警告だったのではないかと思った。

この欲六界において、絶対という言葉は存在しない。
なぜならば、心の本質が
無常を根本としているからである。

◉第二章　他心通（たしんつう）

その一

心を見る、真実をつかむ

しかし、数十年単位、少なくとも数年単位の短い期間においては、
絶対という心の状態が存在している。
それを知る力、これが「他心通」なのである。

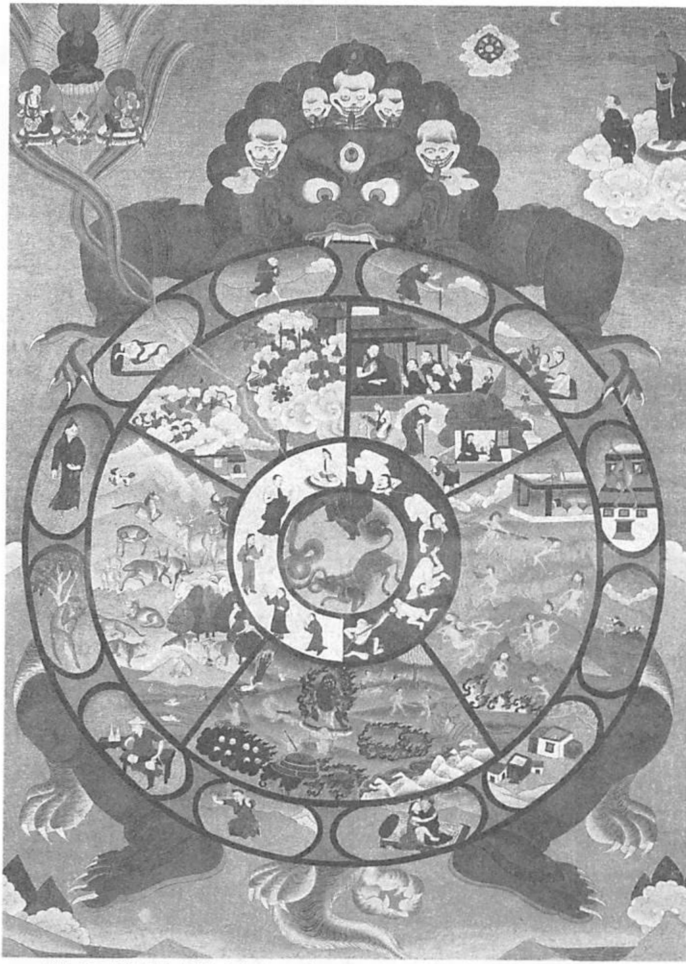
一　失敗しないための超越神力

◉相手の心を〝見る〟

この欲六界（地獄界・動物界・餓鬼界・人間界・憤怒天・戯忘天という六つの世界からなる現象界）において、絶対という言葉は存在しない。なぜならば、心の本質が無常を根本としているからである。

しかし、数十年単位、少なくとも数年単位の短い期間においては、絶対という心の状態が存在している。それを知る力、これが他心通なのである。

相手の心が正義に基づいているのか、あるいはそうでないか、大きな心の持ち主であるのか、深遠な心の持ち主であるのか、浅薄な心の持ち主であるのか、あるいは情報に対して、迅速に反応するのか、スローに反応するのか、貪りの心を

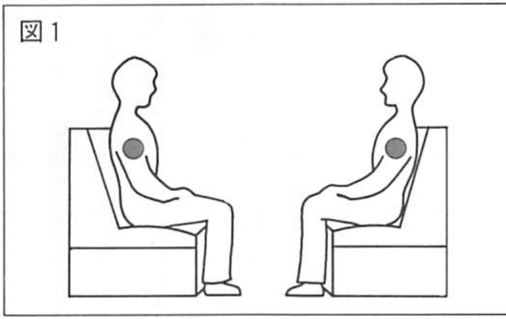


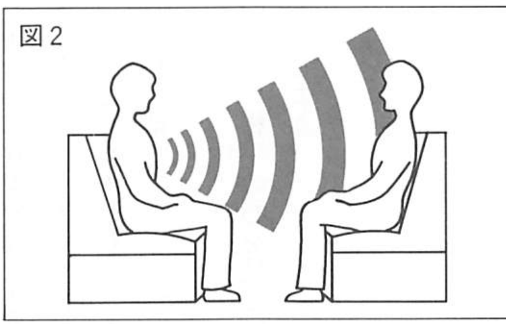
欲六界の輪廻転生を表わしたチベットのマンダラ。瞑想に熟達したオウム真理教や、
インド、チベットの修行者は、その世界が単なる作り話ではないことを知っている。

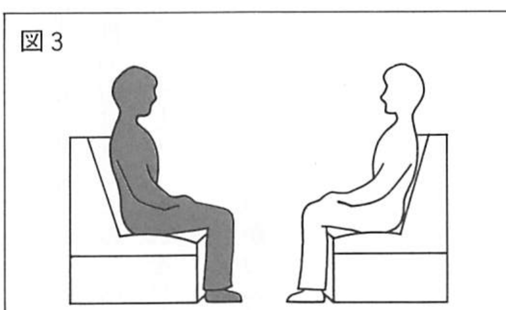
持っているのか、反対に布施する心を持っているのか、真理のデータが根づいているのか、無智のデータに覆われているのか、真実をありのままに語るタイプなのか、それとも物事を嘘で固めるタイプなのか、人を尊敬する心を持っているのか、嫉妬心で固められた心なのか、人を簡単に裏切るのか、それが自己の不利益になったとしても約束を守るのか、人を排斥する心の持ち主なのか、人と和合する心の持ち主なのか、あるいは、異性を単に性欲の対象と見るのか、そうでないのか――他心通に熟達すると、こういう人の心が手に取るようにわかるのである。なぜなら、心の状態を視覚的に見ることができるようになるからである。

この力は、初期の段階においては、まだ視覚的に相手の心を見ることまではできない。ただ相手の心に自分の心が感応する形で相手の心を知ることができる。これは何となくわかるといった感じである。次の段階になると、感応しなくても、相手の発するヴァイブレーションを察知するという形で、この神通力が現われるようになる。つまり、自分の心と別個にそういうヴァイブレーションを発してい

他心通







●他心通には３つの段階がある。
第１段階「相手の心に自分の心が感応し、何となくわかる」（図１）
第２段階「相手の発するヴァイブレーションを察知する」（図２）
第３段階「視覚的に相手の心を認識する」（図３）

る心の存在を知るのである。例えば、自分が空腹でないにもかかわらず、空腹のストレスのヴァイブレーションの存在を察知するということなどが挙げられる。そして、最終段階に到達するといよいよ視覚的に相手の心を認識することができるようになるのである。言うまでもなく、わたしの神通力は既にこのレベルにあり、わたしはまさに相手の心を〝見て〟いるのである。そして、それを見るのは心眼なのだ。

それでは、わたしがどのように相手の心を見ているのか、いくつかのエピソードによってご紹介することにしよう。

二　シャクティーパットの恐怖

◉自己を犠牲にする救済の儀式

オウム真理教には、マハー・ムドラー成就というステージがある。これは、ラージャ・ヨーガ、クンダリニー・ヨーガに続く、第三段階目のステージであり、ここに至って、その成就者には〝正悟師〟という称号が贈られる。正悟師は自己の煩悩を完全に止滅し、彼岸へと到達した者たちであり、その心は光り輝き透明である。仏典によく阿羅漢という言葉が出てくるが、正悟師は、この阿羅漢に相当する。これは、個人の完成を目的とした小乗仏教の最高位である。また彼らは三悪趣（地獄界・動物界・餓鬼界）へと流転するカルマを切っている。そして、宗教上の指導者であるグルと同じ世界へと転生する条件を備えているのである。

それではなぜ、このステージに到達していながら、同じく苦界である人間界、憤怒天、戯忘天のカルマも切ってしまわないのだろうか。

それはグルが衆生（しゅじょう）を済度するために、人間界、憤怒天、戯忘天へと転生する場合に、一緒についていくことを可能としておくためなのである。

さて、ここではマハー・ムドラーを成就した後、オウム真理教の「シャクティーパット」と呼ばれる特別なイニシエーションを行なったマハー・ケイマやヤソーダラーの変化についてお話ししようと思う。まず、その前にこのシャクティーパットについてご説明しておかねばなるまい。

シャクティーパットとは、解脱者が相手の眉間に指を当て、高次元のエネルギー（マハー・ニルヴァーナのエネルギー）を直接移入するという高度なイニシエーションである。これによってエネルギーを受けた人は、霊的エネルギーであるクンダリニーを覚醒させることができたり、神通力が身についたりといった霊的プロセスの進化と心の浄化や安定といった心のプロセスの進化を併せて得ることができ





シャクティーパットは、尊師に始まり、マハー・ケイマ正大師、ヤソーダラー正大師へと受け継がれた。クンダリニーの覚醒、心の浄化など、これまでに多くの神変を現わしてきたイニシエーションである。

る。しかし、シャクティーパットを行なう方は、逆に相手のカルマを背負うこととなり、心身共に大変なダメージを受けることになるのである。これは欲界における苦の総量が一定であるためで、相手の苦が減った分、確実にその苦のデータが移行しているのだということだ。

例を挙げるならば、インドの聖者ラーマクリシュナ・パラマハンサはシャクティーパットによって受けたカルマによる咽頭ガンで死んでいる。また、オウム真理教でも以前、クンダリニー・ヨーガの成就者であったプンナ師がわずかに一人のアメリカ人にシャクティーパットを行なっただけで、いきなり脱肛し痔になってしまったという顕著な例がある。これは、そのアメリカ人のアパーナ気（下に引き下げるエネルギー）が異常に強かったためである。現在、彼はマハー・ムドラーを成就しており上向（じょうこう）のエネルギーが強くそんなことはあり得ないだろう。しかし、データの交換はこれほどはっきりと起こるのである。

したがって、他人の苦しみを自己の内側に内在させること、そして、それを消

化することが、シャクティーパットを行なう修行者の修行課題であり、マハー・ムドラー成就後の大乗の修行（自分一人が絶対的幸福の境地に到達すればよいというのではなく、自己を犠牲にしてでも他の苦しめる魂を救済してゆこうという菩薩の修行）に向けての課題ということになる。

◉変化したバルドーの色

ところが、信徒に対してこのシャクティーパットを行なったマハー・ケイマやヤソーダラーの状態を見てみると、マハー・ムドラーの成就によって得ることのできた清らかな心の状態があっさりけがれてしまったのである。

このご両人は、自分自身の変化というものに慣れていない。自分自身がカルマを受けて変化してしまっているということにすら気付かないほどである。これは傍迷惑もいいところだし、それを指導するわたしもたまったものではない。

ヤソーダラーの例を採って少し説明しよう。

彼女のシャクティーパット前の状態がどうだったのかと言えば、赤紫のバルドー（バルドーとは、中間状態という意味で次の生を決定している）を持っていた。それには他の配色が全くないというほどのものである。

これは、地獄・動物・餓鬼・人間という下の四つの世界のカルマが止滅し、来世は一〇〇％憤怒天へと生まれ変わるというカルマの状態であることを示している。ここで安定したステージの者は、決して嫌悪、憎しみの情、無意味な知識、あるいは執着、卑屈さといった要素を完全に止滅した状態で存在している。そこには、ただ権力の執行のみが存在しているのである。

実は、彼女は、わたしの妻でもあるのだが、特にマハー・ムドラーを成就してからというもの、お互いがお互いの仕事に没頭するという形で夫婦生活が展開していた。わたしは、それを理想の夫婦生活であると考えていた。

というのは、彼女は自分の仕事はきちんとこなし、わたしに対してはわたしの

他心通



自己の苦しみを喜びとし、他の苦しみを自己の苦しみとする。オウム真理教では、このシャクティーパットが大乗の加行の第一歩とされている。

仕事の手伝いをするという以外、全くといってよいほど関心を示さなかったのである。

ところが、八月下旬から始まったシャクティーパット後の変貌ぶりといったら、驚嘆に値する。まさに、下位チャクラ（それぞれの世界とつながる霊的センター）の生起といわざるを得ない。

その内容については、あまりにも悲惨なのでここでは触れないことにしたいが、赤紫の綺麗な光が、青緑色に変化し、さらに緑色と黒色に変化したことは事実だ。このバルドーの色は、執着と無智と嫌悪を表わす。本人に聞いてみたところ、まさしく教学もできず（無智）、わたしに対する執着と嫌悪があったということであった。そして、ちなみに執着がブルー、無智が緑そして嫌悪は黒として見えるのである。

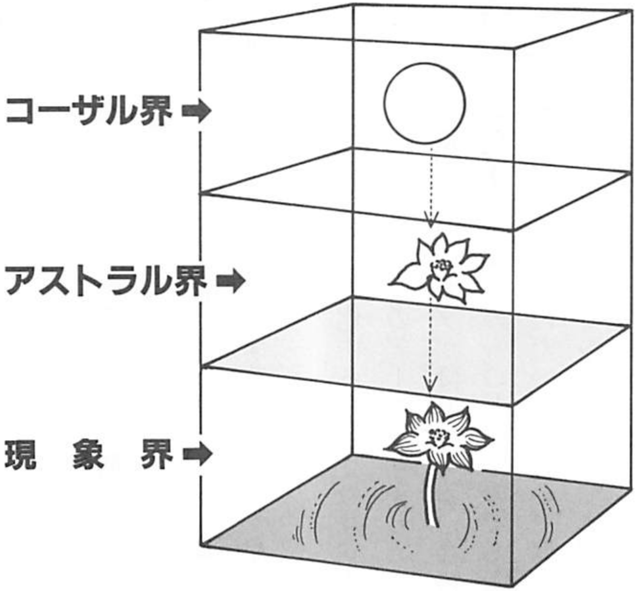
このように他心通というものは視覚的に見ることができ、視覚によって得た情報は正確なのである。

◉心の光と現象化のスピード

では、ヤソーダラーは単にステージを落とし、人間界と動物界と地獄界の象徴である執着と無智・嫌悪にさいなまれていたのだろうか。いや、そうではない。心の空性の光は、シャクティーパット前と後では明らかに変化していた。光が強くなり、アストラル世界のデータを現象化するスピードが早まったのである。このことは、付記しておきたいと思う。

なお、アストラル世界のデータを現象化するというのは、こういうことである。無始の過去からはるかな未来に至るまでのデータが存在しているコーザル世界から、次の段階でアストラル世界へとデータが降りてくる。このアストラル世界へ降りてきたデータが、この現象界で現実のものとなるのである。

例えば、予知夢というものを考えていただいたらいい。夢の中で未来の出来事を見る。そして、それが実際に起こる。このとき、夢で体験している世界がアス



●この世界の現象は、「データの世界」コーザル世界からアストラル世界へ降りたデータが、この世で現実化したものである。

トラル世界なのである。ただし本来アストラル世界を体験するのは瞑想時においてであり、いかに高いアストラル世界を体験するかということが修行の目的の一つとなっている。

ヤソーダラーの場合、このアストラル世界に降りてきたデータが通常より早く現実のものとなるようになったということである。このスピードが速ければ速いほど、因と果を理解しやすい。カルマを早く消滅することができる等のメリットがある。なお、このスピードを速めているのはサットヴァの光（功徳がもたらす善性のエネルギー）である。

三　相手の本性を見抜く他心通

◉Kさんの場合――黄色い貪りのバルドー

東京のKさんという女性は、銀座に画廊を持つ、一見熱心な信徒であった。ここでわたしが一見と言っているのは、彼女のバルドーがどんよりとした黄色、つまり貪りの心を強く持っているということを示していたからである。

この信徒はよく、未来の布施について師に話をしていたものである。しかし、わたしは、その話が出る度に笑って話を遮ることにしていた。なぜなら、わたしは彼女のバルドーが貪りを表わしていることを見て知っていた上に、彼女のバルドーのどこを探しても、信仰を表わすブルーの光もなければ功徳を表わす白い光も微少だに存在しなかったからである。

わたしは彼女にアドバイスをした。
「未来の功徳を語るより、今のあなたにできることをなしなさい。」
と。しかしながら、彼女はその指示に従わず、相変わらず未来の布施のことを語るためにオウムに通っていた。
その彼女が、わたしが本支部活動をやめている間に、あろうことか、「蓮華の会」のリーダーになってしまっていた。蓮華の会とは女性信徒でつくっている奉仕活動を中心とした集まりである。わたしが知っていたら、リーダーなどにはさせなかった。
あれは、一昨年の四月のことだったと思う。わたしが危惧を抱いたとおり、彼女はオウム真理教から離反し、それと同時に、蓮華の会のメンバーにも、オウム真理教を誹謗中傷する電話をかけまくり、結果的に数十名のメンバーをオウム真理教から離れさせてしまったのである。これは東京本部における蓮華の会のほとんどのメンバーということになる。

離反の理由は、在家成就というものを狙っていたものの、それだけの徳もなく、またわたしの指示に従わない修行をして、それが果たせなかったということらしい。

彼女のように徳のない心の持ち主は、実際に口に出す言葉とがかけ離れており、言葉に相反して心の方が現象化してしまうものなのである。こういうとき、その人の言葉を信じている人だったら、裏切られたという思いにかられるであろうが、わたしの場合は、心の方をあらかじめ見てしまうので、「やっぱりそうか」という感じで、それ以外の感情が生起することはない。

◉鬼神に食われた荷車隊商

ここで『南伝大蔵経』から『パーヤーシ経』の一部をご紹介したいと思う。

「王族よ、それでは、あなたにたとえ話をしましょう。たとえによって、この世の識別ある若干の者たちは、説かれた教えの意味を解釈するものです。

王族よ、その昔、荷車千台にもなる大規模な荷車隊商が、東の国から西の国へ向かっていました。そして、その隊商は行く先々で、急速に牧草や薪や水や野菜や葉っぱを消費していったのです。

ところで、その隊商には二人の隊商指導者がおりました。一人は五百台を、もう一人は五百台を率いていたのです。そのとき、その指導者たちはこう思いました。

『これは荷車千台にもなる大規模な荷車隊商だ。わたしたちは行く先々で、急速

に牧草や薪や水や野菜や葉っぱを消費している。この隊商を五百台ずつ二つに分けたらどうだろう。』

そこで、彼らは片方五百台、もう片方を五百台と、その隊商を二つに分けました。そして、片方の指導者は、たくさんの牧草と薪と水を積んで隊商を出発させたのです。

出発して二、三日経ったとき、この隊商は、色が黒く、赤眼で、束ねた髪を解き、黄蓮華の花飾りを付けて、濡れた衣服に濡れた髪の男に出会いました。彼は泥まみれの車輪でロバに引かれた二輪車に乗って、こちらにやってきます。

それを見て、指導者はこう言いました。

『あんた、どこから来たんだ。』

『これこれの地方からだ。』

『どこへ行こうとしてるんだ。』

『これこれという名の地方だよ。』

『もしかして、あんた、行く手の荒野に大雨が降ったのかい。』
『そうだよ、お前さんたち。行く手の荒野には大雨が降って、道は水であふれ、牧草や薪や水でいっぱいさ。お前さんたち、持っている牧草や薪や水を捨てたらいいさ。荷車の荷を軽くして、速く速く進みなさいよ。牛たちを疲れさせせんなよ。』
そこで、その指導者は隊商の者たちにこう呼びかけました。
『あの男はこう言った。
「行く手の荒野に大雨が降って、道は水であふれ、牧草や薪や水でいっぱいさ。お前さんたち、持っている牧草や薪や水を捨てたらいいさ。荷車の荷を軽くして、速く速く進みなさいよ。牛たちを疲れさせせんなよ」と。
諸君、持っている牧草や薪や水を捨てろ。荷車の荷を軽くして隊商を出発させろ。』
『指導者よ、承知いたしました。』
と、隊商の者たちはその指導者に応え、持っている牧草や薪や水を捨て、荷を軽

くして隊商を出発させたのです。

ところが、彼らが最初の宿で牧草や薪や水に出会うことはなかったのです。二番目の宿でも、牧草や薪や水に出会うことはなかったのです。三番目の宿でも、牧草や薪や水に出会うことはなかったのです。四番目の宿でも、牧草や薪や水に出会うことはなかったのです。五番目の宿でも、牧草や薪や水に出会うことはなかったのです。六番目の宿でも、牧草や薪や水に出会うことはなかったのです。七番目の宿でも、牧草や薪や水に出会うことはなかったのです。

そこで、全隊は災難と損失に陥りました。そして、その隊商にいた人々と牛たちはすべて、人間ではない人食い鬼神に食べられ、骸骨だけが残ったのです。

さて、二人目の隊商指導者は、『今やあの隊商はだいぶ先へ進んだだろう』と解釈し、たくさんの牧草と薪と水を積んで隊商を出発させました。

出発して二、三日経ったとき、この隊商は、色が黒く、赤眼で、束ねた髪を解き、黄蓮華の花飾りを付けて、濡れた衣服に濡れた髪の男に出会いました。彼は

泥まみれの車輪でロバに引かれた二輪車に乗って、こちらにやってきます。
　それを見て、指導者はこう言いました。
『あんた、どこから来たんだ。』
『これこれの地方からだ。』
『どこへ行こうとしてるんだ。』
『これこれという名の地方だよ。』
『もしかして、あんた、行く手の荒野に大雨が降ったのかい。』
『そうだよ、お前さんたち。行く手の荒野には大雨が降って、道は水であふれ、牧草や薪や水でいっぱいさ。お前さんたち、持っている牧草や薪や水を捨てたらいいさ。荷車の荷を軽くして、速く速く進みなさいよ。牛たちを疲れさせせんなよ。』
　そこで、その指導者は隊商の者たちにこう呼びかけました。
『あの男はこう言った。
「行く手の荒野に大雨が降って、道は水であふれ、牧草や薪や水でいっぱいさ。

お前さんたち、持っている牧草や薪や水を捨てたらいいさ。荷車の荷を軽くして、速く速く進みなさいよ。牛たちを疲れさせせんなよ」と。
諸君、しかし、この男は我々の友人でもなければ、親族や親類でもない。どうして我々はその男を信じることができようか。持っている牧草や薪や水を捨ててはならない。今までどおりの積み荷で隊商を出発させろ。持っている荷物は捨てないようにしよう。』
『指導者よ、承知いたしました。』
と、隊商の者たちはその指導者に応え、今までどおりの積み荷で隊商を出発させたのです。
そして、彼らが最初の宿で牧草や薪や水に出会うことはなかったのです。二番目の宿でも、牧草や薪や水に出会うことはなかったのです。三番目の宿でも、牧草や薪や水に出会うことはなかったのです。四番目の宿でも、牧草や薪や水に出会うことはなかったのです。五番目の宿でも、牧草や薪や水に出会うことはなかっ

たのです。六番目の宿でも、牧草や薪や水に出会うことはなかったのです。七番目の宿でも、牧草や薪や水に出会うことはなかったのです。

そこで、前の隊商が災難と損失に陥ったのを、彼らは目の当たりにしました。すなわち、人間ではない人食い鬼神に食べられた、前の隊商にいた人々と牛たちの骸骨に出会ったのです。

そこで、その指導者は隊商の者たちにこう呼びかけました。

『諸君、これは、前の隊商があの愚かなリーダーである隊商指導者の言うとおりにして、災難と損失に陥ったものだ。諸君、では、我が隊商の価値のない商品を捨て、前の隊商の高価な商品を取ろう。』

『指導者よ、承知いたしました。』

と、隊商の者たちはその指導者に応え、自らの隊商の価値のない商品を捨て、前の隊商の高価な商品を取りました。そして、その賢明なリーダーである隊商指導者の言うとおりにして、安全にその荒野を渡ったのです。

王族よ、このように、愚かで無智なことに、あなたが真理にのっとらずに来世を求めていたら、あたかも隊商指導者の男のように、災難と損失に陥ることになるでしょう。そして、聞いたことは即信じられると、あなたが考えるなら、あたかもその隊商の者たちのように、災難と損失に陥ることになるでしょう。

王族よ、その邪悪見解を拒絶しなさい。王族よ、その邪悪見解を拒絶しなさい。長い間、あなたは不利益に苦しんではなりません。」

（『長部経典』「パーヤーシ経」より）

この経は三つのことを示唆していることにお気付きだろうか？　第一は、Kさんのようにアドバイスも聞かず自己流の修行をしても結果を得られず災難が多いということ、第二は、安易に誹謗中傷する者の言葉を信じると取り返しのつかないことになるということ、そして第三にわたしのような宗教上の指導者（グル）は賢明な隊商の指導者のようにすべてを見通しているのだということである。

◉Mさんの場合——信なき出家が招いたものは

もう一つ同じような例を挙げよう。和歌山のMさんの話である。

Mさんは、自然農法の大家で、関西担当のF師との間に大変な信頼関係ができていた。そして、今から二年くらい前から、彼が信徒の中で頭角を現わし出し、F師の方も、彼をわたしに有望な信徒として推薦していたのである。

だが、わたしは彼に初めて会ったときから、彼の心の中の信が大変弱く、しかも安定したものではないこと、そして、彼が純粋な信仰心を持っておらず、現実生活上の利害のためにオウム真理教の信徒となっているということを察知していた。

F師は、何度となく支部活動における信徒のリーダーとして、あるいは、オウム真理教の月刊誌『マハーヤーナ』の「私のオウム」で取り上げている信の厚い代表的な信徒として、彼を推薦してきた。わたしは無論了承しなかった。だが、

何度も何度も懇願されたために、仕方なく、彼個人ではなく、彼のやっている自然農法グループの中の信徒を取り上げるということにしたというエピソードが残っている。

また、Mさん本人からは何度となく出家願いが出された。わたしは、あれだけ現実生活に執着している人に、出家修行などやっていけるはずがないと考え、三回それを断わった。しかし、今年の五月になって、やむなく彼の出家を認めることになったのである。

どうして、こんなにも反対していた彼の出家を認めたのかというと、オウム真理教の活動に大きな変化が生じたことによる。このとき、全支部活動は中断され、道場は閉鎖されることになったのだ。

これは、オウム真理教が既に社会的な誹謗中傷を受けていたため軌道修正の必要があったことと、わたし自身、もっとはっきりと未来を知り、確実な予言をしなくてはならないと決心し、特殊な瞑想修行に入ろうとしたためである。

わたしは考えた。

（Mさんは、支部活動が行なわれていない間に真理から離れてしまうだろう。）

と。そのために、彼を出家させることにしたのである。もちろん、彼が出家に耐えられないだろうという気持ちをぬぐい去ることはできなかったが、どっちにしろ離れてしまうのだったら、せめて出家という縁だけでも持たせてやった方が、彼のためにもなるはずだ。それに加えて、彼のバルドー体験を聞くと来世間違いなく三悪趣（地獄界・動物界・餓鬼界）へと落ちることは確実だと思われた。少しでもそれから脱却する可能性を指し示してあげるのはわたしの役目でもある。

◉変貌した本当の理由

そこでわたしは和歌山へ行き、彼が以前から懇願していたとおり、出家させたのだった。

果たして、彼は出家してから一週間も経ずして心を乱し、勝手に還卑（げんぴ）してしまった。その上、こともあろうに、〝加害者の会〟に入るとともに、他の宗教団体に入信してしまったのである。そして、今ではわたしの殺害まで企てている始末である。また、マスコミを使ってのオウム叩きをも行なっている。彼のこの豹変ぶりは彼の利害に基づいている。なぜなら、彼に勧められて一緒に出家した実母と妻子が自分と一緒に還卑することに同意せず、出家生活の続行の方を選んだからである。

わたしはどんな高弟であろうとも、他人の目は信じない。自分自身の心眼のみを信じている。F師は、かなりの精神的および霊的体験をしている人である。一

つ一つの目の前を通過する現象については、ある程度正確に見ていたのだと思う。ただ、このような大きな流れになると、理解が及ばなかったのであろう。

他心通は、このような形で現象化するのである。

ヤソーダラーがこう言っていた。

「一番最初にMさんに会ったときから『自然食じゃ人間は変わらない。ひどいものだ』とおっしゃっていましたね。実際に彼の心を見られての印象だったのでしょう。それに彼自身、自分の欲望のためにオウムを利用しようとして失敗したということを認めていました。彼は自然農法グループのリーダーとしての地位を確立しようとして、グループのほとんどを信徒にしようと計画したそうです。しかし、その計画が失敗し、多くの人が脱会してしまったとか。これは、昨年の〝狂気の集中修行〟に参加した彼から直接聞いた話です。」

と。

◉救済に絶大な威力

では一体、この他心通をどのような形で信徒の済度に役立たせているのだろうか。それはちょうど、大変透き通った眼の持ち主が、その澄んだ視力によってこの現象界を見渡し、完璧に把握し、それに基づき適切なアドバイスを行なうのと同じように、わたしもわたしの心眼によって見た相手のバルドーをもとに適切なアドバイスを行なっているのである。

オウム真理教には「シークレット・ヨーガ」と呼ばれるものがある。これは、わたしをはじめとして神秘的な力を有している者が、信徒に対してその神秘的な力によって適切なアドバイスをしたり、その人に必要な修行法やマントラの伝授を行なうシステムである。

例えば、無智に覆われている人がいたとしよう。わたくしは、まずその無智の原因をバルドーによってサーチし、無智を取り除くために有効な修行法、そして、

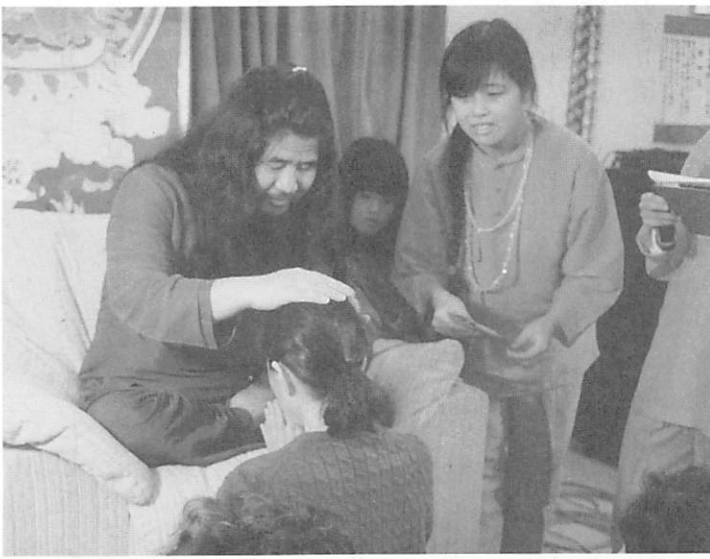
無智のカルマを切るマントラを伝授するのである。
　このシークレット・ヨーガにおいて、他心通は不可欠だ。なぜかというなら、それは、信徒の相談内容を聞いただけでは、その本質がわからないからである。
　例えば、ある信徒の相談で、
「性欲が強くて仕方がありません。どうしたらよいでしょうか？」
というものがあったとする。わたしは即座にその人のバルドーを見る。すると、性欲を増大させる本やビデオ等を見、そのために性欲が増大している人の場合だったら、緑色のバルドーが見える。ただ性感を貪っている人だったら黄色のバルドーが見える。また、その人が対象となる異性に執着し、貪っているとしたら、ブルーのバルドーが見えるのである。
　つまり、同じ性欲の相談を受けたとしても、人により答えが違ってくるのである。他心通がないとシークレット・ヨーガができないというのもご理解いただけよう。

なお、わたしは弟子たちがそれぞれのヨーガを成就したとき、その判定にはこの他心通と「死生智」、「漏尽智」を使う。死生智と漏尽智についての詳しい説明は後に譲りたいが、簡単に言うなら死生智は相手がどの世界へと転生するか、あるいは、したのかを見抜く神通力で、当然のことながら、この力を有する者はバルドーを自由に行き来することができ、バルドーを知り尽くしているのである。もう一つの漏尽智というのは、相手がいつ解脱できるかということを含めて、この現象界、そしてアストラル世界、コーザル世界のすべてを見通す力で、最高の神通ともいわれている。

ところで、他心通は、他人の心の状態を見るためのみならず、自分自身の状態を知るためにも使われているので付け加えておこう。

シークレット・ヨーガ、特別イニシエーション、説法会、永代帰依祈願などによって、わたしの神秘的なエネルギーはどんどん失なわれていく。特に「永代帰依祈願」は、インド式のシャクティーパットを行なうのであるから、そのエネル

他心通



ギーの漏れといったら甚だしい。必然的にステージにも揺れが生じる。そこでわたしは、自分のバルドーを視覚的に見ながら、ステージのコントロールに勤めているのである。

◉結婚、商談……現実生活でも

この他心通、本書をお読みの皆さんも身につけることができたら、大いに役立つこと請け合いである。

結婚を第二の人生のスタートと考える人もいるが、他心通がありさえすれば、間違いのない結婚相手を選ぶことができる。例を挙げるなら、黒色のバルドーの人と結婚すると、殴られたり蹴られたりする暴力的結婚生活が待っているとか、緑色のバルドーの持ち主は、その両親から自分を守ってくれず、また、情報に流されやすく出世があまり望めないなどと、相手のバルドーを見るだけで察しがつ

くのだ。

相手が黄色いバルドーの持ち主であったなら、まずは財産目当ての結婚であることを疑わなければなるまい。ブルーのバルドーの持ち主だったら、大変優しく、あなたに対して執着してくれるだろう。赤紫のバルドーだったら、その人は必ず社会的に出世する。そして、もし白色のバルドーであったなら、優しさ、名誉、権力、地位、お金といった現世の願望をすべて成就できる可能性があるのだ。もちろん、少なくともブルー以上のバルドーを持っている相手を選ぶべきである。

同じように、商談、人間関係、企画等、人間が関わっていることになら、どんなときにも他心通を使うことによって成功の可能性を高めることができるわけである。

ところで、前章でご紹介した天耳通、そして本章の他心通、このどちらもオウム真理教の出家修行者でクンダリニー・ヨーガの完成間近い者、またはマハー・ムドラーの成就者以上の者はすべて経験している。なぜなら、これらの二神通を含

め、仏教でいわれる六神通は、本来わたしたちに備わっているものだからである。そして、その力を発揮することができるかできないかは、修行によっていかに魂を透明にし、その光を強めてゆくかにかかっているのだ。

言い換えるなら、神通力はわたしだけのものではなく、だれにでも手に入れることができる力なのである。その証明として、わたしが指導している弟子たちの体験を多く本書に載せるものとする。

なお、他心通は、『南伝大蔵経』において、以下のように書き記されている。

「このようにサマディに入り、心は欠点がなく浄化され、煩悩はなく、煩悩を増長させるものを消滅して、柔軟で、役目に適し、集中継続して、不動を得たとき、彼は他心通に心を定め傾注するのです。

そこで、彼は他の生命体や他の魂の心を、自らの心によって把握して認識し理解します。すなわち、

愛著(あいじゃく)ある心を愛著ある心と認識し理解する。
愛著を離れた心を愛著を離れた心と認識し理解する。
邪悪心ある心を邪悪心ある心と認識し理解する。
邪悪心を離れた心を邪悪心を離れた心と認識し理解する。
迷妄ある心を迷妄ある心と認識し理解する。
迷妄を離れた心を迷妄を離れた心と認識し理解する。
閉じ込められた心を閉じ込められた心と認識し理解する。
散らばった心を散らばった心と認識し理解する。
大いに広がった心を大いに広がった心と認識し理解する。
大いに広がっていない心を大いに広がっていない心と認識し理解する。
有上の心を有上の心と認識し理解する。
無上の心を無上の心と認識し理解する。
サマディに入った心をサマディに入った心と認識し理解する。

サマディに入っていない心をサマディに入っていない心と認識し理解する。
離解脱(りげだつ)した心を離解脱した心と認識し理解する。
離解脱していない心を離解脱していない心と認識し理解する。
大王よ、たとえるならば、装飾好きな性質の女性や男性や若者や青年が、鏡や欠点がなく浄化された透明な鉢の水に、自らの容貌を観察し、ほくろがあるのをほくろがあると知り、ほくろがないのをほくろがないと知るようなものなのです。

大王よ、ちょうど同じように、向煩悩滅尽多学男達が、このようにサマディに入り、心は欠点がなく浄化され、煩悩はなく、煩悩を増長させるものを消滅して、柔軟で、役目に適し、集中継続して、不動を得たとき、彼は他心通に心を定め傾注するのです。

そこで、彼は他の生命体や他の魂の心を、自らの心によって把握して認識し理解します。すなわち、

愛著ある心を愛著ある心と認識し理解する。

愛著を離れた心を愛著を離れた心と認識し理解する。
邪悪心ある心を邪悪心ある心と認識し理解する。
邪悪心を離れた心を邪悪心を離れた心と認識し理解する。
迷妄ある心を迷妄ある心と認識し理解する。
迷妄を離れた心を迷妄を離れた心と認識し理解する。
閉じ込められた心を閉じ込められた心と認識し理解する。
散らばった心を散らばった心と認識し理解する。
大いに広がった心を大いに広がった心と認識し理解する。
大いに広がっていない心を大いに広がっていない心と認識し理解する。
有上の心を有上の心と認識し理解する。
無上の心を無上の心と認識し理解する。
サマディに入った心をサマディに入った心と認識し理解する。
サマディに入っていない心をサマディに入っていない心と認識し理解する。

離解脱した心を離解脱した心と認識し理解する。
離解脱していない心を離解脱していない心と認識し理解する。
大王よ、これもまた、現実に利益をもたらす出家修行者の果報であり、前の現実に利益をもたらす出家修行者の果報よりも、より素晴らしく、より極妙なのです。」（『長部経典』「出家修行者果報経」より）

第二章 他心通

たしんつう

その二

見える、感じる――手に取るように
「体験！――他心通」



マハー・ケイマ

Maha・Khema

目に見える煩悩

人の想念が物質化して、白いエネルギーの矢となって飛んでいく様子は、よく見えます。その人が意識を集中していると太い白い矢のようで、集中力が弱いと、白い糸のようです。

相手の心の働きが、自分の心の働きとして移ったり、相手の使っているチァクラが、自分のチァクラの振動として伝わったりすることは、よくあります。

また直感的に相手の引っかかっているところを言い当ててしまうこともよくあるのですが、ただそれが、相手の心を視覚的に見るところまではいっていないで

す。相手の心の煩悩の色を、黒、赤、黄、白と断片的に透視することはあります。
ただし、シャクティーパットを行なえば、直接にエネルギー交換が起こりますから、相手の身体の悪い部分、気道の詰まっている部分などは視覚的（霊眼による）によく見えます（黒ずんでいる）。また、相手の好みの食べもの、好みの異性や、タマス、ラジャス、サットヴァのエネルギーがどのような状態であるかもよくわかります。



マイトレーヤ

Maitreya

真理の道から外れずに

ある日の朝、わたしは瞑想と睡眠の中間のような半覚醒状態にありました。その中で、出家者の一人で、女性のT・Jさんがオウムをやめて現世の生活をしているのをヴィジョンとして見ました。彼女は、現世の生活をしつつも、何やら心の中に葛藤があるような感じの話し方をしていたと思います。

その状態から覚めたとき、わたしは、

「T・Jさんとは、部署も全然違い、話すこともほとんどないのに夢を見るのはおかしい。ヴィジョンの内容に何か真実があるかもしれない。」

という強い思いが生じました。

そこでさっそくT・Jさんのいる支部に電話をしてみると、心が揺れていて、還俗（げんぞく）しようと思っていた（確か「その日還俗しよう」と言っていたと思うが）ことがわかりました。わたしは、そこで少し話をし、できるだけ出家という真理の道から外れないように説得しました。

それから早くも一年近く経とうとしていますが、Tさんは今でも出家修行を続けています。

身近に接している人だけではなく、何百キロ何千キロと離れていても、その人の心の状態がわかり、しかもその人の修行に役立つなら、神通というものに、よく使われる超能力という言葉とはまた全く違った大きな価値が見いだせるのではないでしょうか。

出家生活というのは、解脱・悟りという最高の宝を得る最短コースなのですが、かといって日々の生活に厳しさがないわけではありません。現世的な享楽を捨断

する面などもあるため、出家して日の浅い方や教義の根付いていない方の場合、それまでに修習してきた煩悩に振り回され、精神的に大変不安定になることがあるのです。しかし、それが自己の心のけがれであることを理解し、乗り越えたときには現世では得られない、この上なく大きな自由と幸福が得られるのです。

T・Jさんの場合も、このときの他心通がなかったら、自分の早まった行動を大変後悔することになったに違いありません。



マチク・ラプドンマ

Ma - gcig Labs - kyi sgron - ma

①シヴァ大神のお怒り

それは、今から約二年前、クンダリニー・ヨーガの極厳修行のときでした。そのときは十数人ぐらいのメンバーがサティアンビル三階の一つの大きな部屋で修行をしていました。開けっ放しにしてある南側の窓の外では、尊師がわたしたちの修行を進めるために護摩法を行なっていました。

尊師の行なわれる護摩法は、シヴァ大神や仏陀に対して純粋な供養を行なうので、そのときも非常に素晴らしいヴァイブレーションが窓の外から伝わってきました。わたしは、

「シヴァ大神が祝福してくださっている。なんて気持ちがいいんだろう。」などと思いながら、しばらくの間その至福の中に浸っていたのですが、護摩法は火をたくため煙が出、また、シヴァ大神もわたしたちに少しでも多くのエネルギーを与えてくださろうとなさっているためか、少し強めの風がわたしたちの修行をしている空間に煙とともに吹き込んできたのです。すると、他の修行仲間が、

「煙たくて修行ができない。」

と言って窓を全部閉めてしまったのです。ただ一カ所だけ、数センチ隙間が開いたままの状態になり、そこからピューピューとすごい勢いで風が吹き込んでくるのです。

わたしはその風の音を聞いていると、シヴァ大神がわたしたちが窓を閉めてしまったことに対して、激しくお怒りになっているような感じがしてならなかったのですが、そんなことを他の人に言ってもわかってもらえるだろうかという否定的な気持ちもあったので、どうしようかとしばらくモンモンとしていたのです。

すると、それから四時間ほど経ったころ、尊師がわたしたちの様子を見に部屋に入ってこられたときのことです。尊師は部屋に入られるなり、突然、
「なぜ窓を閉めているんだ！　シヴァ大神が怒っているじゃないか！」
と怒鳴られ、すぐに窓を開けるようにと指示を出されたのです。

②遠隔で知った母の容態

次の体験は大阪支部で支部活動をやっていたときのことです。
わたしの実家は福井で、両親や兄弟はそこに住んでいます。大阪は比較的、福井から距離的には近いのですが、そのときは約半年ぐらいは家族が信徒であるにもかかわらず、電話での連絡すらしていませんでしたので、一体家族がどういう状態なのか全く知る術もありませんでした。
しかし、せっかく近くまで来ているということもあって、どうしているのかと

特に母親のことをしばらく考えていたときのことです。わたしの体がどんどん冷えてくるのではありませんか。もしかしたら、母親は今、体を悪くしているのではないかと思い、次の日に実家に電話をしてみると、やはり、母親はもともと丈夫ではなかったのですが、特にそのころは体が非常に冷えると同時に体のあちらこちらが痛み、普通に座っていることすら苦痛な状態なのだと言っていました。

また、その何日か前に、弟が頻繁にわたしの夢に出てきていたので、弟がわたしのことを気にかけているのではないかと思い、聞いてみると、ちょうどわたしが弟の夢を見ていたころ、弟が数日間大阪に来ていたのだという答えが返ってきました。



心当たりのない不安

スッカー
Sukhā

三年前の極厳修行のころのことになりますが、瞑想中に心がなぜか不安定になり、どうしても瞑想に集中することができなくなったことがありました。自分でも、なぜこんなに不安定になるのか心当たりもなく、困っていたのですが、後に同室で瞑想していたYさんが、自分の荷物のことを気にかけて一日中修行できなかったということを聞き、彼の心の状態がわたしに伝わってきたのだということがわかりました。もちろん、その後その不安定な状態はなくなりました。



救済の強い味方

ジーヴァカ
Jivaka

わたしの場合、精神的に揺れているサマナが現世へ落ちようとしていると必ずわかるのです。
例えば、わたしのセクションに以前いた人なのですが、あるとき、彼が荷物を玄関に置いてから朝の立位礼拝の修行に出ていたことがありました。わたしは起きたとき、
(おかしい。)
と思い、彼の立位礼拝が終わるのが、だいたい朝の十時くらいなので十分くらい

前に、道場の玄関前のロビーの椅子に座って待っていたのです。そこで、修行が終わるころになって道場の二階に行って、
「変なこと考えていないか。」
と彼を呼び止め、
「ちょっと来い。」
と言って、部屋に行って話したら、
「実は今帰ろうと思っていた。」
と言うわけです。そして、
「荷物も全部用意して、玄関のところに置いてあったのだが、どうしてわかったんだ。」
と、びっくりするのでした。
　その後彼は、自己の壁を乗り越え、見事クンダリニー・ヨーガの成就をし、現在は堂々と支部活動に励んでいるのです。



メーギヤ

Meghiya

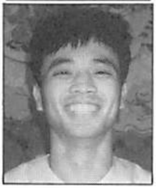
書店さんの心もズバリ

マスコミによるいわれなき誹謗中傷、警察権力による不当な宗教弾圧後、オウム出版の本に対する書店さんの対応は様々です。たとえ今、社会的に問題があるかのようにいわれているオウム出版の本であっても、売れるならば置くというところや、ほとんど売れなくても本の内容を知っていて置くというところや、話題性があるから置くというところなどがあるわけです。

新刊の注文を取っていると、電話で注文を取る場合、相手の声を聞いてみると注文を出してくれるかどうかがすぐわかり、それが波動として伝わってくるので

す。そして、直接担当の人と会ってみると、相手の人の心がさらにわかり、注文を出してくれるのかがだいたいわかってしまうのです。

今後いっそう他心通が極まれば、相手の心を目で理解できるのではないかと思います。そして、尊師のように遠隔で心の状態がわかれば最高だと思います。



ガンガーティーリヤ
Gangātīrya

診ずともわかった症状

わたしは信徒時代、接骨医（治療所）を自分で開業していました。その当時よく経験したことなんですが、患者さんが治療院の門を開けた瞬間、自分の肉体の同じ部位に痛みを感じ、その人を診もしないうちから、その患部の症状がわかるという体験を多くしました。

その当時は、助手と二人で業務をしていたため、わたしが他の患者さんの治療に当たっているときなど、助手に症状を説明して、わたしの手の空くまでの対応を指示し、わたしがその後それを確認のために行くということを行なったりして

多忙をしのいでいました。

例えば、五十五歳の膝内障（膝の捻挫）の方が入られた瞬間に内側の靭帯がどの程度痛んでいるとか、四十二歳の男性のギックリ腰で同様に右の長腰筋と腰方形筋をどのくらい痛めているとか、六歳の小児の手首の骨折等、数え上げればキリがないくらい、よくわかるようになり、オウム真理教の修行の素晴らしさを多く経験しました。

●第三章　麻原彰晃が語る「神通力は必ずつく！」●

❶神通を身につける、これが秘訣！

四如意足と神々の思索

（八九年五月八日　於・富士山総本部）

◉まず、欲に始まる

今日は、神通力をつけるための四つの根本についてね、話をしたいと思います。この四つの根本、四つの根っこ、四つのベース、これを仏典では四神足（しじんそく）、四つの神の足ね、あるいは四如意足（しにょいそく）――如意というのは意のままにという意味だね――というふうに表現されている。

で、これは『阿含経』では、その現象としてどういうことが起きるとかいうことよりも、まあ上っ面をサッとしかね、書いてないわけだけども、実際はものす

ごく修行者にとって大切な内容が、その深い意味合いとしてあるわけだね。で、この四つの神足を修習（しゅじゅう）するならば――修習というのは訓練――するならば、確実に神通力を得ることができる。

さあ、いよいよ神通力の話だね。

その四つとは何かというとね、「欲」、まず欲に関する神足、ね。そして、「勤（ごん）」これは進めるという、要するに修行に励むという意味のね、第二番目の神足と。そして「心」、心の神足と。そして第四番目が思索をね、するための神足と。

なぜこの順番で、ね、如意足が展開されるか、わかるか。簡単に説明するならば、まずその欲というのは、とにかく自分は神通力を身につけたいんだ、身につけたいんだ、身につけたいんだと思う心と、ね。二番目はそれをひたすら修行すると。三番目は、心を安定させると。四番目は、そういう神足について、神通について思索すると。

◉如意足の順、その意味は

はい。では、S、どうしてだ。どうしてこの順番で並んでるのか。じゃあね、考えて。S、それから、ええ、K、それからV、P、ね、それからTと。この五人に聞こう。だれでも構わないからこうだと思うのを答えてくれ、一人ずつ。ちゃんとマイクを回してね。

(S) えっとまず——やっぱり順番についてはわかりません。

(K) まず何で、欲が先に来るかというと、当然、これは解脱でもそうですけども、とにかく自分はそれを身につけるんだということが根本に来るんではないかと。これは何でもそうですけども、解脱はしたいんだと。それから修行はしたいんだと。そういうものがベースに来ると。

次に、当然それに対しての習練方法とか修行方法があるわけですから、それに

ひたすら励むと。しかし、それもある程度限界があるというか。それはなぜかというと、当然心が透明でないと、神通力というのは神の力ですから、自分の中にいろんな煩悩とかそういうものがあると、心が透明じゃないと、いろんな神通力が付いてこないと。だから、当然心を磨かなきゃいけないと。そのためには、いろんなことをジュニアーナヨーガ的な考え方で思索をし、よく考えてそういう煩悩というものを落としていくと。こういう順番になるんではないかと思います。

（V）えっと、Kとほとんど変わらないんですが、考えてみると「起承転結」に近いような気がします。まず欲と。身につけたいと思うという、意志することというのが最初の「起」と。起こるということが来まして、それを受けるものとして修行という実践が来ると。それで、ただ実践しているだけではなかなか結果が出ないと。神通というのはどうしてつくかというと、自分が自分の、ある程度煩悩から解き放たれ、透明になった状態になって、そして心が安定して解脱という状態が得られたときに初めてつくものだと。それで、このただ修行していくとい

う受けがあって、それでここで起承転結の「転」になって換わって、心が安定する神通が付くという、一つのレベルがあると。それで最後の思索というのは、ラージャ・ヨーガ、クンダリニー・ヨーガの後のマハー・ムドラー、ジュニアーナ・ヨーガのプロセスを見てもわかるとおり、その後に思索というプロセスが入ると。それで神通はかなり安定する。つまり結末に向かうのではないかという感じがしました。

(P) まず神通というのは、神に通じる道であるということで、以前尊師が説法で言われたように、そこで必要とされるものは、功徳とそして瞑想の修行であるということですから、まずは求道心を背景として修行にひたすら励む。そして、煩悩を落として心を成熟させると。そして、瞑想による深い思索というのが必要とされるというために、このプロセスをたどるんではないかと思います。

(T) まず、神通について思索するためには、心が安定してないとできないと。で、心を安定させるためには、心の修行、これに入るための身の行ないっていう

か、行、そういった身体からの修行をする方が、心が安定しやすいだろうと。で、まず、そういう身体の修行をするためには、最初にそういう「する」という意識、意志というか、欲というものがなければならないと。

ですからその逆にまず、自分自身が神通を身につけたいという強い動機付けというか、そういう気持ち、欲がまずあって、そして修行、いわゆる行動というか、身の行に入って、で、これを通して心が安定してくると。で、心が安定してきて初めて、実際に正確な思惟ができるようになると。思索ができるようになると。そのことによって初めて、神に至る道の神通がつくというふうに思います。

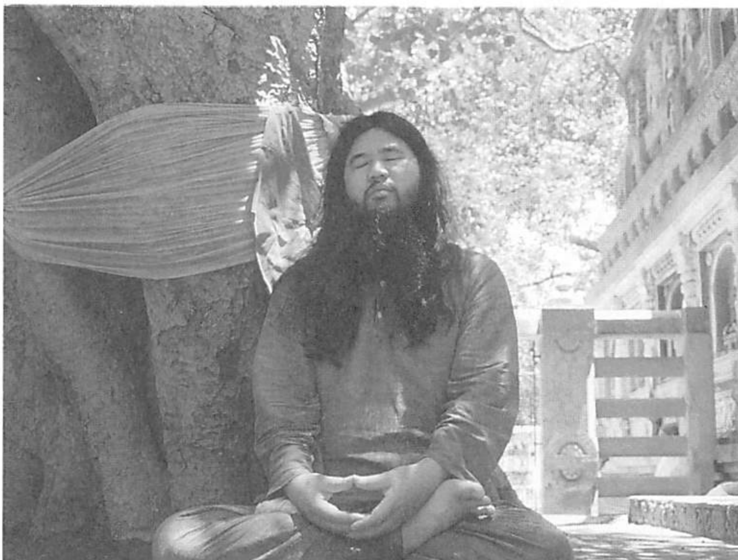
◉心の絶対的平安が決め手

だいたいいいと思うね。ただその三番から四番目のプロセス、これは特に大切なプロセスであると。なぜだろうか。それはね、神通に対する綜制(そうせい)の時間というのは、二時間とか初めのうちは三時間とかかかかるわけだよ。慣れてきたらそれが当たり前になるわけだけど。いいかな、まず。

で、その例えば神通の源というのは、いろんな神秘体験なんだね。例えば、光がずっと見え続け、いきなりバッーと目の前が明るくなって、ね、それはものすごくまぶしい光であると。ところが心はどうなると思うか、それに対して。もし寂静(じゃくせい)の状態でないと、とらわれたり、あるいは恐怖したりするんだね。特にわたしの経験からいくと、恐怖の方が強いね。とらわれるときというのは、「あっ、来たぞ。これがどうなるんだ」っていう期待感。あるいは恐怖。

そうすると恐怖するということ、あるいは期待感ということは、心がどうだろ

神通力は必ずつく!



神秘体験に期待や恐怖はつきもの。ここで心の平安を得ているか否かによって、
その後の結果は大きく変わってくる。

うか。乱れた状態だろうか、それとも集中した状態だろうかと。当然、乱れている状態なんだね。
今から二千五百年前、なぜ釈迦牟尼の教団があれだけの神通力者を有したかと。それは解脱をしていたからであると。では、何の解脱をしていたのかと。それは心解脱、心の解脱をしていたからであると。
なぜ心の解脱をすると神通が生じるんだと。別に心の解脱をしたから神通が生じるわけではない。心の解脱をすることによって、綜制の技術、例えば思索によって、あるいは集中によって得る神通があるわけだけど、その技術というものを身につけることができるんだ。そしてその技術は完璧であると、ね。
要するに、最後に落ち着くのは、解脱をしているかどうかなんだよ。最後に落ち着くのは、心が絶対的な平安を得てるかどうかなんだね。その絶対的な平安というのは、いかなる身体に、あるいはいかなる心に、ね、あるいはいかなる感覚に変化が起きたとしても、それに対してじっと集中し続けられると。一切の心の

動揺なく集中し続けられると。わかるかな。

◉真理を背景として神通を持つ

そして、この四つの修習。それからね、二番目の瞑想修行の実践の準備として、身口意を浄化すると。この三つの修行、これを行なうならば、あなた方は間違いなく神通力者になれよう。

いいか、みんなよく聞きなさいよ。解脱さえしてしまえばそんなに難しいことではない。だからまず早く解脱をすると。

そして解脱をした大師(たいし)は、次に何を修習するかといったら、この四つの神足を修習しなさい。そのためには絶対的な心の平安を得なければならない。集中し続ける時間、心の平安をもとに集中し続ける時間を、できるだけ長く行なう。そして、その修習ができたならば、それをなした人はすべて神通力者となる。

そして、今わたしが考えている神通力というのは、一般的に夢といわれているような神通力、これをやはりね、少なくとも二年くらいの間には多くの大師方に得てほしいと思います。

そのためには、日々のワークに集中すると。あとはザンゲに集中すると。あとはツァンダリーに集中すると。そして暇があれば、とにかく瞑想したい、瞑想したいと。高い世界の瞑想をしたいと。大きな瞑想をしたいと、それを思い続ける。でなかったら、わたしたちがだよ、わざわざ現世を捨てて出家した意味がない。

絶対的な真理を悟り、その真理を背景として絶対的な神通を持ち、その神通の世界で遊ぶ。そして、その神通の世界で遊ぶ、その遊びそのものが救済につながると、ね。そして、それと同時に功徳の一環として現世的な救済を行なう。これがオウム真理教の、そしてシヴァ大神の示唆されている教団なんだから、それを意識してやるようにしよう。

◉速いスピード、神々の思索と経験

ところでだ、P、神の五十年が、人間の一日に相当すると。そして、それが五百年続く。これは四天王衆天(してんのうしゅうてん)の期間だったよね。これはどういう意味だかわかるか。

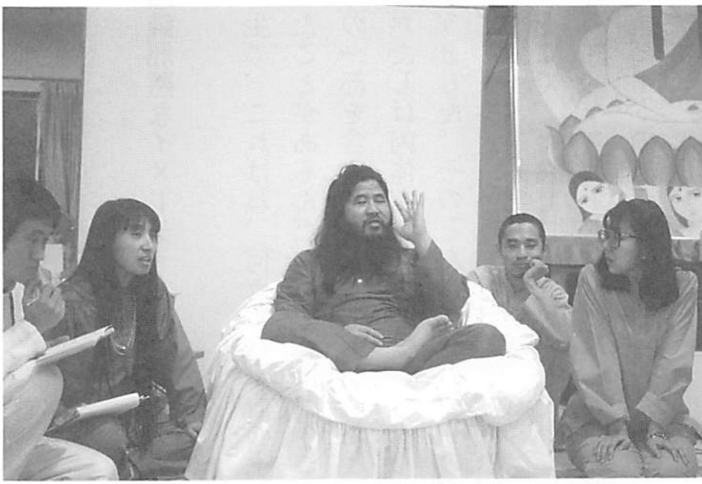
(P)人間の世界に比べて、煩悩が、煩悩というか、支配されるカルマがより安定した状態であるということ……。

はい。一つ君たちに聞きたいんだ。神と——これは今までわたしが経験していたものというよりも、一般的仏教観を覆す見解だから、よく検討してほしいんだけどもね——神と人間の思索のスピード、これはどちらの方が速いと思うか、遅いと思うか。神の方が速い。そのとおりだね。ということは同じ一日の中で、神というものはどうだ、人間の一日と同じ経験をすると思うか、それとももっと多くの経験をすると思うか。

（弟子たち）多くの経験。

そしてすべては心の働きだから、どうなると思うか。神の世界の一日の周期というものは、人間の世界の一日の周期に比べて速いと思うか、遅いと思うか。速い、そのとおりだね。つまりどういうことかというと、四天王衆天において、神の五十年これが人間の一日に当たるんだよ。じゃあ、これはいったいどういう意味だといったら、神々の世界から見ると、人間の世界は止まっているように見えるんだね。

そして、ポイントはここだよ。これは、神の世界のある段階まで通用する世界であると。というのは、天界には二つあるよね。天界というか上の世界には。一つは、地天（ちてん）。もう一つは空天（くうてん）といわれると。ただこの地天、空天という言葉も実際は正しくなくて、欲天と色天という天界があると。そうすると、欲天というのは人間の一日に対応する五十年間のうちに欲望さえ満足させればいいと、ね。ところが色天というのはどうだ。そこに欲望は存在しているかといったら、生命に



修行でも、ステージの高い人ほど知的スピードは優れている。
神々の思索と経験は人間のものよりも速い。

対する欲望しかない。

◉幸福を与えない、愚鈍邪悪なイメージ

実は、前生のある一生で、これはね、何カルパか前の生なんだけども、わたしは十人の弟子を持ってたことがあるんだよ。それは、今ここにいるTとか、Kとかね、まあ他の大師方の一部を含めて十人の弟子がいたと。そしてその十人の見ている前で、いったんわたしは肉体を離れた経験があるんだね。そしてわたしは、高い世界へと飛翔しようとした。そのとたん、その周りの空間がストップしたんだよ。なぜストップしたかというと先程言った欲天の、兜率天（とそつてん）に生まれ変わるための生だったからだ。そこで、わたしはまた思索した。なぜだと。そうかと。神の思索のスピード、神の知的なスピードね、これと人間の思索のスピードを比較するならば、当然神のスピードの方が速いと。

例えば、オウム真理教でいろいろ問題が起きたとき、わたしがその中に加わると一気にスピードが出てくるのも同じじゃないかと。時の流れが変わるんだなと。
ということはどうだ。行為として愚鈍だということは、これは下の世界を表わしていると思うか、上の世界を表わしていると思うか。
（弟子たち）下の世界。
ということはタマスそのものは、その人を幸福にすると思うか、しないと思うか。
（弟子たち）幸福にしない。
ということなんだね。
それからもう一つだ。これは君たちに対する一つのプレゼントだね。ヴィジョンに対する解析の仕方について一つ話をしよう。
例えば、トイレでセックスをしたらどうだろうかと、こういうことを強く思ってたと。するとだ。ヴィジョンの中で、トイレでセックスをするヴィジョンだと

か、あるいはトイレでね、上に舞い上がるヴィジョンだとか見えるわけだね。例えばこういうヴィジョンを見たとき、あなた方は何の生に転生すると考えますか。どうだ。じゃあ、A。形は人間だぞ、一応。

（A）欲の天界。

ところがそうじゃないんだよ。これはハエなんだよ、ハエ。君たちは理解できないかもしれないけど、ハエは自分たちの形をハエの形としては見ていないんだよ。ハエは、もっと自分たちは綺麗なものだと考えてるんだよ。そして例えば、トイレで交わると。そして空を飛ぶと、どうだ。

だから、ヴィジョンというものは一つの幻影だから、今見ている人間の世界のレベルのヴィジョンで検討してはいけない。その背景にある内容をね、徹底的に解析しなければならない。

それからもう一つ。なぜ、わたしがこういう話をしたかというと、思念するだけで未来世の一生を決定付けてしまうわけだね。わたしの場合は、アストラル・

ヨーガとか、コーザル・ヨーガが終わってるから、その生を消してしまうことができる。だから、もちろん消したわけだけど、君たちは消せないからね、まだ。
ということは、君たちが例えばみだらな思念を遊ぶと。例えば君たちがみだらなイメージを遊ぶと。例えば邪悪なイメージを遊ぶとするならば、それが次の生の決定要因になるんだということを強く意識しなきゃならない。
確かに、煩悩の中で遊ぶことは不幸ではない。現時点においてはだ。しかし今も言ったように、例えばその生がハエの未来生をね、決定する場合だってあるんだよ。あるいはゴキブリの未来生をね、決定する場合だってあるんだよ。だから欲の貪り、あるいは欲の喜びをね、貪りの喜びをね、捨てなさいよと言ってるわけだ。いいかな。
そりゃ、ハエというのは空飛べるよな、どうだ。それから、ね、ハエとハエの当然交接はあるよね、どうだ。そして、ハエに生まれ変わる背景は、無智だ。いいね。

❷神通力から解脱へ――あなたの中の知らない世界

光、熱……クンダリニー・ヨーガの奇跡

（八七年六月二十六日　於・神奈川県丹沢）

注　このころ尊師は、信徒のレベルに合わせ、他を利するための大乗の修行については意図して説かれませんでした。したがって、この説法では個人の修行の完成を「最終解脱」と呼ぶなど、現在のオウム真理教の言葉の定義と一部異なるものがあります。

◉不死の扉を開け！

今日は、今からたどっていくであろう瞑想のプロセス、解脱までの瞑想のプロセスについて、『阿含経（あごんきょう）』ではなくて、また『ヨーガ・スートラ』ではなくてね、

現実的なプロセスとしての話をね、今日はします。

まず、わたしたちは修行に入って何を第一になさなければならないかというと、それは動性のエネルギーを活性化しなければならない。動性のエネルギーとは何かというと、要するにクンダリニーだ。いいですか。

そして、クンダリニーには、三つのステージがあって、その第一段階は熱です。第二段階はヴァイブレーションの世界、第三段階は光のクンダリニーと。熱、それからヴァイブレーション的なクンダリニー、そして光のクンダリニーと、まずこの三つのクンダリニーを覚醒させなければならない。

そうすると、どういうことが起きるかというと、まず、チァクラの、下位のチァクラが開き出すと。そして、ナーダ音が聞こえる。光が見える。この三つの現象が起きてくる。肉体的には、体が異常に熱い。そして、背骨がね、揺れる、いろんな形で揺れる。そして、光がパッ、パッ、パッとする。この三つのステージに分けられる。

それがね、みんなここまで来ると、もうわたしは修行が終わったんだとか、あるいは修行がかなり進んだんだとか言うけれども、実際はそうではない。それはちょうど、この小鼻の奥にね、スシュムナー管の分かれ道があります。そのスシュムナー管の分かれ道のアージュニァー・チァクラにつながっているところがまだだいたい通ったに過ぎない。

ところが、わたしたちの解脱に必要なのは、このアージュニァー・チァクラに対する道筋じゃないんだね。何が必要かというと、このサハスラーラに到達する道筋が必要なわけだ。

そして、クンダリニーが上昇して、このサハスラーラ・チァクラに到達すると、それを秘儀の中では、「不死の扉を開く」とか、あるいは「ブラフマランドラの結節を破る」とかいう言葉を使って、とっても素晴らしいよ、というようなことが書かれている。

確かにここまで来ると、素晴らしいね。しかし、これも大したことがない。こ

のとき何が起きるかというと、わたしたちは「意思の光球」と「理智の光球」というものをね、霊視することになる。
なぜ確信を持ってわたしがこういう言い方をし出したかというと、わたしの弟子、ケイマあるいはシャンティー（ソーナー師の前のホーリー・ネーム）、それとわたしの体験と合わせて話しているんだよ、これは。いいですか。そして、インドの教典と合わせているわけだ。で、そこで、教典に書かれていないことを今話しているんだからね。

◉意思鞘とイメージの光球

まず、上昇したエネルギーは、こちらの方はもうどうでもいい。このちょうどブラフマランドラに立っている直線的な道だね。エネルギーはまず、意思の光球を、わたしたちに霊視させるようになります。それは、黄金の糸でできている。

感覚としてはね。そしてわたしたちは慣れていないから、初めはこの黄金の糸でできている「意思鞘（さや）」しかないんじゃないかと、いや、意思鞘しか見えないんだね。

　ところが慣れてくると、その意思鞘の周りにね、わたしたちのイメージを司っているもう一つの層があることに気付く。これはね、初めのうちはダブっているように見えるんだね。ダブっているというか、同じ面の中の中央が意思で、その外側がイメージだというふうに見えるわけだけども、慣れてくるとそれがきちんと二層でできていることがわかる。意思鞘が手前にあって、その奥にイメージの光球があると。いいですか。そしてそのイメージの光球というものは、絶えず変化している。大きさもね。

　そして、そこからエネルギーがどんどんどんどん満ちてくると、もう本来はここで普通の修行者はストップです。そしてその後、グルがサハスラーラから強烈なエネルギーを入れると、どうなるかというとね、また降りるんだよ、エネルギー



グルの力なくして超越神力の発揮は難しい。

が。その降りるのはどこから降りるかというと、ツァンダリーの中央を通って降ります、ね。で、降りたエネルギーはどうなるかというと、次は「地元素」をわたしたちに霊視させ出すね。

◉「地水火風空」——元素の崩壊

この地元素の色というものは黄色。いいですか。そして、この黄色の地元素が見え出すと、わたしたちは、わたしたちを構成している肉体の外枠というものが取れて、瞑想時には、それが崩壊した状態になります。それは意識の拡大とも違う。ちょうど肉体がつぶされたような状態になるんだね。つぶされて広がった状態になります。いいですか。

次にわたしたちが霊視する光は、「水元素」です。水元素の色は、慣れないと白に見える。しかし、実際はスカイブルーなんだね、これは。いいですか。水元

素の色はスカイブルーです。そして、このスカイブルーが見えるようになると、本当の意味でのアストラルと、それからこの三次元世界とがつながります。そして、どういうことが起きるかというと、例えば眠りに就く。周りの音が聞こえる。しかし、自分は眠っている。こういうことが起き出すわけだね。あるいは瞑想する。深い意識状態に一つの意識はあって経験している。それと同時に、周りの世界の物音もすべて聞こえている。これが水元素の状態だ。いいですか。

もうこの地元素も解脱といえるよ。水元素も解脱といえるよ。これはわかるね。「ラトナサンバヴァの解脱」、それから「アクショブヤの解脱」までの今、話をしているんだからね。

次はね、「火元素」の霊視だ。火元素の霊視はどうなるかというと、バーッと自分の体がね、燃え上がっている。これは赤が見えたとか、青が見えたっていう世界ではない。体が燃え上がっている。ちょうどここにグヤサマジャがいらっしゃるけれども、このグヤサマジャのバックみたいなね――この色はちょっと綺麗じゃ

ないけども——もっと実際は強烈な赤です。燃え上がるような赤です。その赤い光がわたしたちの体を取り囲むね。

このときに、いいですか、わたしたちは「軽安（きょうあん）」の段階に入るんだね。実際には固定が始まる。しびれる。全身がしびれるんだ。で、このしびれというものは、わたしたちにとって悪くはない。そして、非常に明るくなります。何が明るくなるかというと、見ているヴィジョンが非常に明るくなる。いいですか。しかし、これはまだすべてディアーナといわれている。つまり瞑想状態なんだね、まだ。三昧（さんまい）じゃないよ。

そして、次はわたしたちをグリーンの帯が包むね、グリーン。若干ブルーが入っています。これが「風（ふう）元素」です。そして、体験としては冷たいクンダリニー。心地よくて、冷たいクンダリニーが上昇し出す。いいですか。心地よくて、冷たいクンダリニーが上昇し出して、グリーンの帯が見えます。これが「風のステージ」だ。そしてそのときに何が起きるかというと、空中浮揚だとか、ダルドリー

シッディだとか、あるいは宿命通(しゅくみょうつう)ね、こういう世界に入っていくわけだ。

しかし、これもまだ三昧ではないよ。これは「楽」の状態だ。この状態になると、修行者は何時間でも修行できる。今、ケイマが一日だいたい十八時間ぐらい修行しているわけだけども、これをやっても疲れなくなる。しかも、エネルギーのロスが少なくなる。ほとんどエネルギーのロスをしなくなる。これが「風のステージ」です。

◉三昧、真解脱、そして最終解脱

そして次は「空(くう)のステージ」。これは白銀の世界。白銀の世界といっても、ちょっと説明がつかないけども、とにかく綺麗な世界だ。そしてこのときに何が起きるかというと、わたしたちは「三昧」に入るんだね。

三昧に入って――ちょっとその「風のステージ」から三昧に入るステージを細

かく説明すると、まず一種の虚脱感に襲われます。一種の虚脱感に襲われるんだよ、わたしたちは。そして、心臓が異常に速くなります。慣れないと、

(俺はこれで死ぬ。)

とかね。わたしも何回か経験があったが、

(わたしはこれで死ぬ。)

とかね、そう思うくらいに速い心拍が始まる。いいですか。そして、その速い心拍の後に、三昧に入るわけだ。この空のステージというものがわたしたちのアストラル・ヨーガを完成させる源となる。

そして、三昧に入ったわたしたちの意識状態というのは、いいですか、「真解脱（しんげだつ）」の世界に入っていきます。アージュニァー・チァクラの真解脱の世界。この真解脱というのは言い方を換えるならば、「如実智見（にょじつちけん）」なんだね、これは。いいですか。これは同義語だと思ってください。如実智見と真解脱は同義語だと。

ここでわたしたちは、この世だけではなくて、アストラル、あるいはコーザル



「楽」「三昧」。〝怖さ〟と隣り合わせに真の幸福はある。

の一切の経験をします。そしてわたしたちの生命体というものが肉体でないことに気付く。脱皮したわけだね、ここで。いいですか。そして、この如実智見のステージに入ると、いろんな経験をし出すわけだね。

まず、その人が引っかかっていることをいろいろ経験し出します。それはこの世よりもリアルである。で、一つずつステージが上がっていって、コーザルの光の世界に入る。いいですか。そして最終的なマハーヤーナへのね、門が開かれるわけだよ。これが「最終解脱」といわれている世界、サハスラーラだよ。

実際には、ここで説明が終了するわけだけども、もう少し詳しく言うと、この真解脱から最終解脱に至るプロセスの途中で実際はもう一度、下に下がるんだよ、エネルギーは。どこを通って下がるかというと、前面を通って下がるんです、これは。ね。チァクラの世界を通って下がるわけだ。

そして、わたしが『生死を超える』で書いたね、「夢見のヨーガ」だとか、「バルドーのヨーガ」だとか、あるいは「幻身（げんしん）のヨーガ」だとか、「光のヨーガ」だ

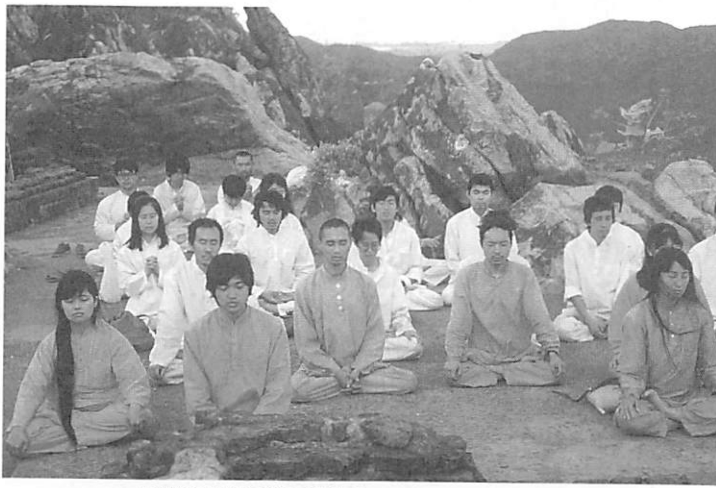
とかいうステージに入っていって最後にポア、そしてマハーヤーナへと入るというプロセスになるわけだね。

◉死の恐怖――バルドーのヨーガ

ここまで詳しくあなた方がガイダンスを受けていると、あなた方の今のレベルがどのへんであるか、よくわかるはずだ。そして、グルが、あるいはシヴァ大神が意思すれば、このステージを、そうだね、早くて、全然修行してない人が、まあ二、三カ月ぐらいで行っちゃうね。グルが意思しなかったら、あるいはシヴァ大神が意思しなかったら、これは永遠に起きない。

それはなぜかというと、この上昇して、下降して、上昇して、下降して、上昇して、下降して上昇するっていうプロセスは非常に恐怖があるんだよ。この中でも幽体離脱をした経験のあられる方が何人かいらっしゃるかもしれないけど、そ

んなものではない。
例えばね、「バルドーのヨーガ」の、ちょっと描写を詳しくしてみようか。まず、座る。そうするとクンダリニーが上昇するね。で、先程言ったような、元素の状態、地元素から空元素まで行って、真解脱の状態に行きます。来た段階で、体全体が、チァクラの上が特にね、振動し出すんだよ。それで、全身がしびれて固定される。
そして次の瞬間、周りが、そうだね、五メートルぐらいかな、五メートル四方闇になります。これは上もそうだ。で、自分は一体どういう空間にいるのか、まずわからなくなる。いいですか。その暗闇の、どういう空間にいるのかわからなくなる自分が、いきなり上昇するわけだ。スーッと。
これは恐怖だよ。真っ暗闇を飛び出すわけだから。そこで、
(あっ、自分は死ぬんだ。)
っていう恐怖が出てくる。



瞑想修行に励む尊師の弟子たち。
真実の世界を知るためには、瞑想に熟達しなければならない。

まあ、実際には、これはカスタネダかな、魔術師の本にもそういう記載があるみたいだし、チベット仏教の本にも、そこのところは描写されていないけども、闇夜への旅立ちとかいう記載があるみたいだ。ところが、それは修行者たちの意識レベルが低いから、そこまでしか経験していないだけであって、それ以上の世界がないかというとそうではないね。

抜け出した魂はどうなるかというと、光の世界へと飛び出していくわけだ。まずはイメージの世界。これは光はあるんだけども、それほど明るくはない。これを「中間状態」といっているね。で、この中間状態イコール、名前でいうとバルドーなんだよね。いいですか。

そして、そこでいろんな経験をして、ま、もし死んじゃった場合には、いろんな光が来て、いろんな経験をして、その人のカルマによって次の生が決まるわけだけれども、瞑想熟達者は、ちゃんと戻ってこれるんだ。ね。

ところがだよ、これをあなた方が、仮にこのガイダンスを受けていたとしても、

ものすごい恐怖だ。

◉来世のコントロール

じゃあ、メリットとディフェクトね、長所と欠点を挙げるならば、経験をしていれば死後恐くない。欠点としては、失敗したら狂ってしまう。ねえ。ここは、あなた方の判断に任せるが、でも実質問題としては、わたしたちが経験しているっていうことは、次の生を決定できるというか、次の生に対して安心ができるというかね、そういうメリットがあるわけだよ。

だから、少なくともあなた方は、今生の修行中にね、バルドーの経験ぐらいはやりなさいよ。ということは、真解脱ぐらいはしなさいよということを言っている、わたしは。いいね。これは、あなた方にとって、大変な恩恵をもたらすだろうね。

そして、今生で初めて解脱にアプローチする人は、いいかな、一人でやるのは所詮無理だろうから、それはわたしや成就したわたしの弟子たちがお手伝いをすることになるだろう。いや、俺は一人でできるんだ、といってやってる人も中にはいる。これはいるんだよ、実際に。会員の中にもいます。セミナーにも出ないし、ただオウムの『マハーヤーナ』を頼りにやっている人もいます。しかし、それは不可能だね。

というのはどういうことかというと、まず、マニプーラ・チァクラで引っかかるんだ。そこで出てくるのは、より具体的な三次元的なヴィジョンだから、わたしたちを引っかけてくれます。わたしたちを幻惑の世界に入れてくれる。

例えば、美女が出てきたり、例えばグルが出てきたり。みんな偽物だ。例えば急に光が来たりね。例えばしびれたり。実際は、すべてのステージが途中のステージに過ぎないわけだね、今言ったとおり。

だからあなた方は、今日話していることは、まだわたしも出版していないし、

それから、だれも書いたことのない内容だ。だから、きちんと理解しなきゃだめだよ。きちんと覚えてしまいなさいよ。

そうすると、あなた方の、まず瞑想における恐怖の三分の一は取り除かれる。三分の一といっているのは、表層意識、潜在意識、超潜在意識の、表層意識の部分での恐怖が取り除かれるから。いいね。

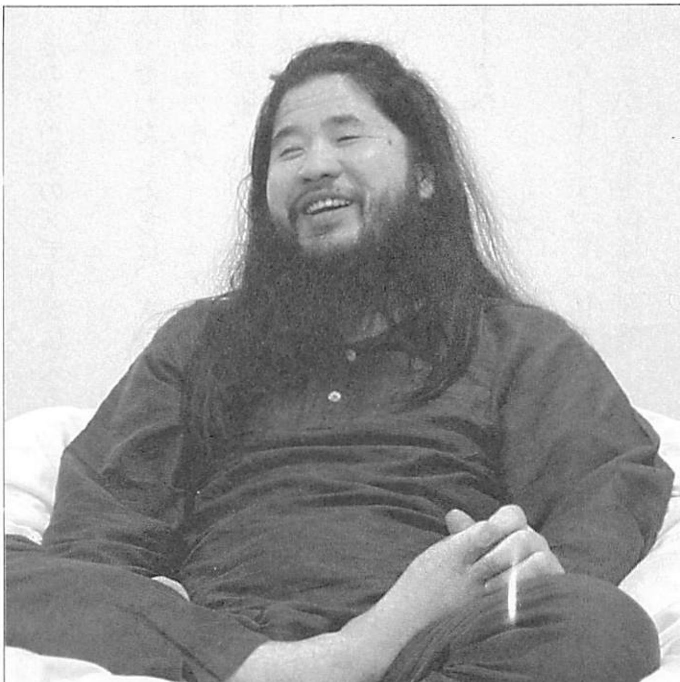
潜在意識は経験を何度か繰り返すとか、あるいはシャクティーパットを受けるとかすることによってしか取り除けないけども、表層意識というのは、知識によって乗り越えることができるからね。

もう一度、さっとあらうよ。まず、クンダリニーの覚醒というのは、わたしたちの熱の世界を破り、次に音の世界を破り、光の世界を破る。付け加えるならば、このとき、まずブラフマンの結節を破り、ヴィシュヌの結節を破り、シヴァの結節を破ると。

破ったエネルギーは、ブラフマランドラの鍵を開くと。不死の門を開く。そし

て、中央管を降りてくる。
次に五大エレメント、地元素の崩壊が起きる。これはイエローだったね。そしてそれは、この肉体が完全につぶされた状態になる。
次は水元素。これは意識の二元化だったね。つまり、眠っている意識とそれから外的感覚の意識とがね、同次元に存在する状態だったね。
そして、次は火元素のね、これはしびれ、それから軽安と一緒だったね、これはね。心身が軽やかになるね、軽安と一緒だった。
そして、風元素。このときは、冷たいクンダリニーが上がる。心地よい、冷たいクンダリニーが上がる。もっと言い方を換えるならば、背骨にあるスシュムナー管を風が昇る。心地よい風が昇るという状態だね。そして、ここでダルドリー・シッディとか、あるいは空中浮揚とかいわれているような状態になる。ここで宿命通がつきますよということだったね。
それからわたしたちは空性に入る。三昧に入る。つまり、風のステージまでは

神通力は必ずつく!



瞑想だが、その次の空のステージに入ると三昧だ、これはね。一種の死が訪れるね、ここで。

三昧に入ったわたしたちは、次はアージュニァー・チァクラの真解脱、如実智見と、一切のものをヴィジュアル的に見る世界に入っていくね。いいですか。

そして最終解脱、ね、マハーヤーナに入っていくわけだけども、そのプロセスというものは、今度は前面をもう一回降りる。そして、「バルドーのヨーガ」や「夢見のヨーガ」や「幻身のヨーガ」をわたしたちは経験していって、ね、最終的にはマハーヤーナに入るんだったね。

◉マハーヤーナへ

じゃあ、マハーヤーナって一体どういうところだと。お釈迦様が、涅槃、ね、ニルヴァーナとか、あるいは大涅槃、マハーヤーナだね、これは、ということに

ついては聞いてはいけないと言っていらっしゃる。そこで、いろんな宗教家や哲学者たちがね、いろんな論議をし出した。お釈迦様が聞いていけないと言うんだから、本来聞かなければいいし、考えなければいいんだけども。でも少し、マハーヤーナの感覚といったらいいのかな、状態について話そうかね。

今日わたしは、わたしの中間状態のボディーはマハーヤーナに入ってきた。そして、バックしてきました。で、このマハーヤーナの状態というのはね、要するに、そうだな、楽しかない状態。もうそれ以外何も存在しない状態ということができるわけだね。しかも、それは時間も消滅してます、そこでは。空間も消滅している。で、ただそこには楽しかない。

ねえ、大乗の発願をして、すべての魂がその状態に安らぐまで、わたしはこの世に生まれ変わろうと言っているわたしでも、そのマハーヤーナに入ってしまうとだ、やっぱり帰ってきたくないと考える。それぐらいに素晴らしい世界なんだね。甘い世界なんだよ。

甘いといってもね、その、どろっとしてないんだな。精妙という言葉も合わないし、何だろうな、要するにすべてが広がっている。すべてが一体、そういう表現が合うかもしれないね。その一体感、そこには安らぎという言葉も合わないし、満足という言葉も合わない。そこには、ただ喜びがあるといったらいいのかな。うん、やっぱりこれは話せないね。

しかし、確かにこの状態を経験することのできる人は、他の物質的なものだとか、あるいは精神的なものだとかに一切興味を持たないだろうね。比較にならないだろう、それは。

◉ボーディサットヴァの使命

そして、すべての魂がもし、その状態に入ったならば、形というものにこだわらなくなり、形というものを否定するようになるだろう。

ねえ、それはわたしたちが、わたしたちの自己に対する所有だとか、あるいは自己に対する、自己の欲求を満たそうとし出したとき、つまり、形のあるものを求めようとし出だしたとき、わたしたちは苦の世界に没入したわけだから、それが苦だと知っているわたしたちにとっては、知って修行して成就したわたしたちにとっては、もう二度とこの世といおうか、形のある世界に再生することはないだろうね。それぐらいに素晴らしい世界、これがマハーヤーナだ。大涅槃だ。

そして、あなた方すべてがその世界に入って、本当に、安らぐという言葉は合わないよ。満足するという言葉も合わないよ。すべてを得るんだね、表現を変えるならば。

あなた方がすべてを得たとき、わたしの修行というものは終わる。そして、このあなた方の中でも、わたしと同じようにね、ボーディサットヴァとして、すべての魂がすべてを得るような状態までね、修行者として、あるいは救済者として、活躍してくれる人が現われたならば、これはわたしにとっても最高の喜びだ。

❸仏教は神秘の世界！

神通をもたらす四ステップ

（九一年三月十七日　於・新東京本部）

◉四つの実践――証智・捨断・現証・修習

はい、それではこれから「超能力セミナー」を始めたいと思います。ま、実際はこの超能力セミナーといっても、正しい言い方をするならば、「神通力セミナー」といった方が正しいのかもしれない。なぜならば、ここに参加しているほとんどの人が、ヨーガタントラ・コースだからである。

で、日本の仏教あるいはインド仏教において、神通力を否定された時期があると。で、まあその否定された時期というのは、今も続いている派があるわけだけ

ど、これは大変な謬見解、大変な邪悪見解である。

その理由はなぜかというと、「聖なる八支の道」の『道相応』の中にこのような記述があります。それは、まず第一に、わたしたちが認識をしなければならないもの、これは「証智」という言葉を使ってあるわけだけども、認識をしなければならないものは、わたしたちの五蘊におけるけがれであると。

つまり、これはどういうことかというと、わたしたちの例えば、形状―容姿に対するけがれ、例えば細長い顔が好きとか、丸い顔が好きとか、ぽっちゃりした体つきが好きとか、やせたスタイルが好きとかいうような、そういう形状―容姿に対するけがれ。

あるいは、感覚、これは例えば味覚的にいうなら、甘いものが好きとか、あるいは辛いものが好きとか、しょっぱいものが好きとかいうような傾向、これもけがれだね。

あるいは、イメージ。例えば、ソフトな感じが好きとか、ハードな感じが好き

とか、あるいは例えば、からむ感じが好きとかね、あるいは拒絶する感じが好きとかね。この第三段階のイメージのけがれと。

第四段階は意志のけがれ。これは、いいことにしろ悪いことにしろ達成しなければ気が済まないということ、そういう傾向。あるいは逆にいつも思ったことが現象化しないということで、挫折感を味わって、結局意志の力が全くなくなっている状態。こういう傾向。

第五番目は意識のけがれと。これは、この現実、生まれて死ぬまでのデータをあまりにも入れ過ぎているがために、実際に、非現実といわれている、しかしそれが真実の世界に対する拒絶、これを生み出すような意識のけがれと。

この五つのけがれを証智すること、これが第一番目であると。これは、五取(ごしゅ)蘊(うん)を証智することが第一であるという教えです。

そして、第二番目は、これを「捨断」すると。シャットアウトすると。どういうことかというと、例えば、形状―容姿の傾向をシャットアウトすると。ある

いは、五感の傾向をシャットアウトすると。あるいは、イメージの欠陥をシャットアウトすると。あるいは、意識のけがれの欠陥をシャットアウトすると。これは捨断です。

で、この捨断をしなければならないものは一体何かというと、まず「渇愛」であると。渇愛というのは、わたしたちがあれを欲しい、これを欲しいという渇愛であると。

それからもう一つ、これはなかなか面白いんだけども、それはこの現実であると。つまり、「非神秘力」であると。非神秘的な世界であると。わたしたちが「これはイスだ」と考える、この感覚、あるいは目で見ているものが、その本質であると考えるものをね、すべてシャットアウトすると。これが、第二番目にわたしたちが実践しなければならない捨断であると。

第三番目は、この現世において、わたしたちが証明し、明かしていかなければならない、実際にわたしたちのものとしていかなければならないものがあると。

それは何かというと、一つは、渇愛つまり煩悩に対する反対の「離解脱(りげだつ)」、解脱であると。もう一つは、非神秘力の反対である「神秘力」であると。

つまり、今日行なわれるセミナーというのは、皆さんにとっての一歩であると。一体何の一歩なのかというと、それは非神秘の世界から神秘の世界へと移行する一歩であるといわざるを得ない。これが、第三番目であると。

では、第四番目は一体何だと。何を「修習」するのかと。何を一生懸命なせばいいのかと。これが面白いんだね。

これは寂止、つまり心を静め、心を正当にするという修行と、もう一つは正観、正しい観察であると。で、当然この寂止、正観については、皆さんもよく知ってのとおり、例えばプラーナーヤーマやマントラが寂止に効果があり、あるいはバクティーとか布施、あるいは持戒を守ることが正観と関係していることはよくご存じのはずである。

つまり、これらの四つを実践すること、これが結局すべてである。で、これら

四つを実践することがすべてであるとは何を意味しているのかというと、要するにオウム真理教の修行そのものが、本来は超能力セミナーのはずなんだね。本来は超能力を得るための道のはずなんだね。本来は神通力セミナーのはずなんだね。本来は神通力を得るための道のはずなんだね。

現に例えば、師、あるいは正悟師、正大師と上がっていけば、いろんな神秘的な経験をする。まあ、それは予言、あるいは透視、あるいは他心通、天耳等を含めて。

で、これは当然であると。なぜかというと、オウム真理教の教義は、完璧な仏陀釈迦牟尼の教義に加えて、その後の後世の、タントリックの修行者の教えを付加した、世界で最高の教義を有しているからであると。

◎絵にかいた餅にしないように

ではだ、これを「絵にかいた餅」にしたのはだれかといったら、これはここにいる皆さんであると。つまり、実践をしないと。まあ、バクティーとかあるいは功徳は積むけども、修行しないと。

で、実はわたしがなぜ東京、次の週大阪で超能力セミナーを開こうとしているわけだけども、それを行なったかというと、信徒さんがまずね、土台となる超能力セミナーに参加しないと。超能力セミナーに参加しないということは、一体オウム真理教の神秘的な世界をどのようにして伝播できるんだと。ね。でしょ。だとしたら、わたしが出て皆さんに超能力セミナーの素晴らしさ、神秘的な世界があるんだよということを証明するしかないじゃないかと。

おそらく、この中の三分の二ぐらいの人はいろんな経験をするだろう。で、経験しない人はこう考えればよろしい。

「わたしは五取蘊に引っかかっているんだ。」

と。

「わたしは捨断ができていないんだ。」

と。あるいは、

「わたしは寂止と正観という修習がなされていないんだ。」

と。そして、

「他の三分の二の人がそういう体験をするということは、わたしも必ずや寂止と正観の修行をすることにより、五取蘊を理解することにより、あるいは渇愛をシャットアウトすることにより、あるいは非神秘的なもの、現実と思われているものをシャットアウトすることにより、必ず神秘力を身につけ、そして離解脱できるんだ。」

と。それを確信していただける今日のセミナーになれば最高だと思います。

もちろん、この神秘的な力を培うためには、例えば「四つの如意足」、ね、決

意如意足、精進如意足、あるいは思念如意足、観慧如意足といったようなものがあるけども、まあ、ここではそういう難しい話はさておき、頑張って修行しようと。ね。

（具体的指導、省略。）

◎内なる体験を深めるために

功徳、瞑想、そして教学と。この三本は、わたしたちを高い世界へと導いていきます。

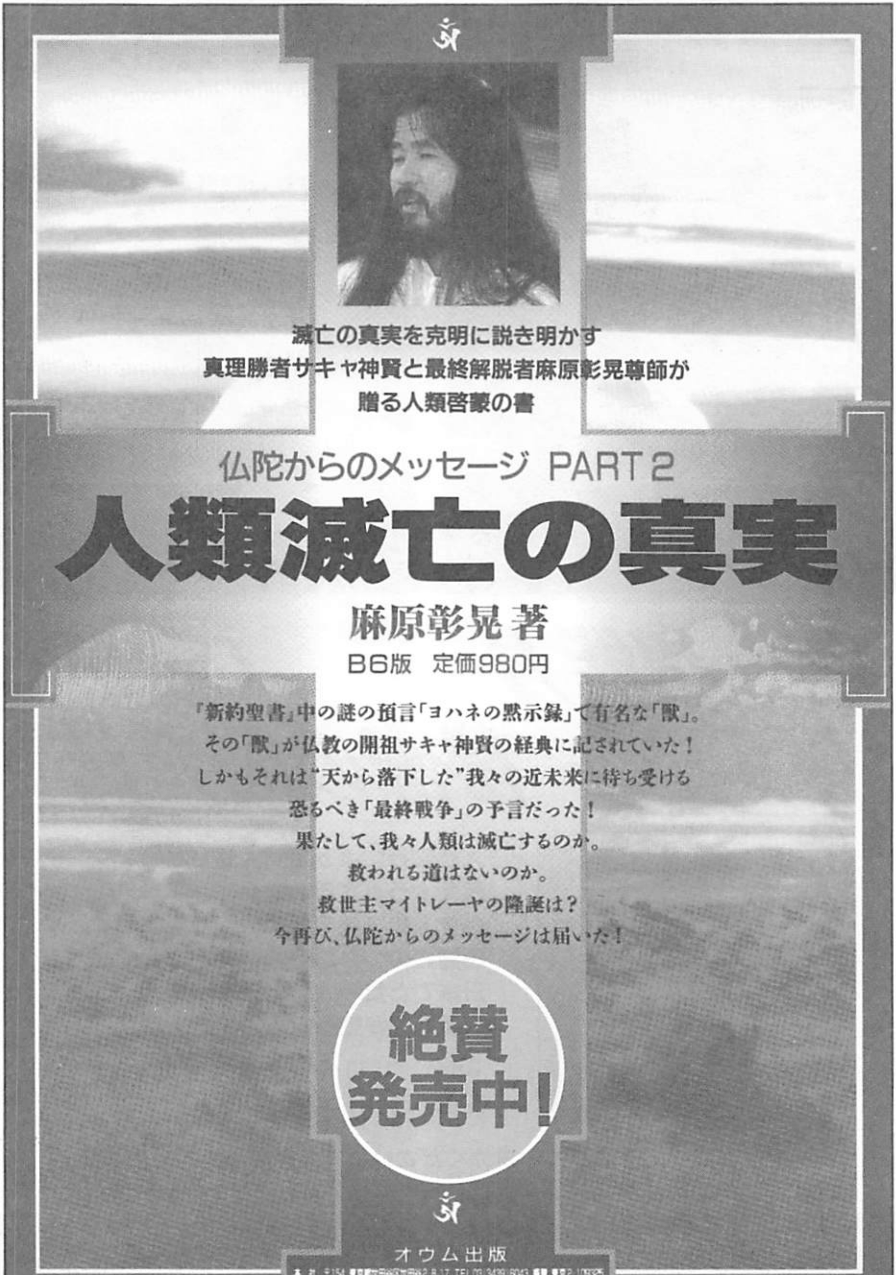
オウム真理教の今の信徒の方々の活動を見ていると、功徳、そして教学についでは少しずつ少しずつ勢いがついてきているけども、以前に比べて瞑想についてちょっと足が遠のいているのではないかなと思います。

で、この瞑想というのは、実際四月十五日の「死と転生」でもそこははっきり

するわけだけども、わたしたちが正確に死後の選定をする場合、あるいはこの人生を正確に歩く場合ね、絶対に必要なわたしたちにとっての実践の一つです。

ですから、このような超能力セミナーをきっかけとして、あるいは日々のコースをきっかけとして、皆さんが自分の内なる体験をどんどんどんどん深めていってください。もしそれを追求なさるならば、わたしも人間として生きている価値というものが、そこにあっても大変うれしいことだと思います。

ですから、今後ね、功徳、教学だけではなく、瞑想もしっかりと行ないましょう。いいですね。



滅亡の真実を克明に説き明かす
真理勝者サキャ神賢と最終解脱者麻原彰晃尊師が
贈る人類啓蒙の書
仏陀からのメッセージ PART 2
人類滅亡の真実
麻原彰晃 著
B6版 定価980円
『新約聖書』中の謎の預言「ヨハネの黙示録」で有名な「獣」。
その「獣」が仏教の開祖サキャ神賢の経典に記されていた！
しかもそれは“天から落下した”我々の近未来に待ち受ける
恐るべき「最終戦争」の予言だった！
果たして、我々人類は滅亡するのか。
救われる道はないのか。
救世主マイトレーヤの降誕は？
今再び、仏陀からのメッセージは届いた！
絶賛
発売中！
オウム出版
本社 〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17 TEL03(3439)6043 振替 東京2-109325
営業部 〒168 東京都杉並区宮前3-6-11 TEL03(5370)1596

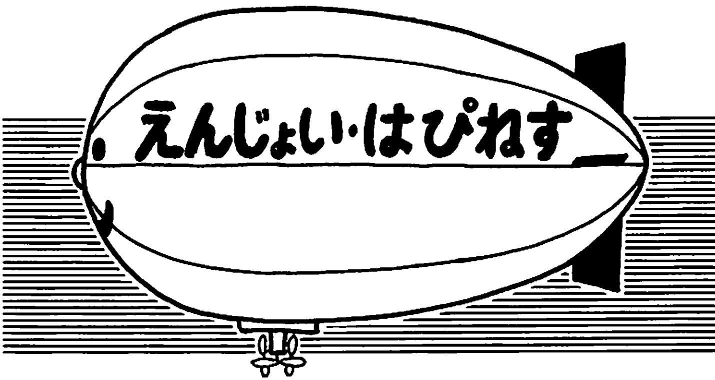
この本をお読みになって、どのような感想をお持ちになりましたか。あなたのご意見を、ぜひ下記の「『超越神力PART1』読者係」までお送りください。

〒168　東京都杉並区宮前3 - 8 - 11
オウム出版「『超越神力PART1』読者係」

◆各本支部のご案内◆
富士山総本部　0544(54)1267
〒418-01　静岡県富士宮市人穴381-1
東京本部　03(3327)8565
〒156　東京都世田谷区赤堤2-42-5 杉田村松ビル1F
新東京本部 03(3396)9393
〒167　東京都杉並区下井草4-4-4　井口ビル2F
大阪支部　06(397)1022
〒532　大阪府大阪市淀川区西宮原1-8-14 八光ビル2F
福岡支部　092(474)2877
〒812　福岡県福岡市博多区博多駅前2-6-15 第一渡部ビル6F
名古屋支部　052(252)0709
〒460　愛知県名古屋市中区栄5-8-14 万国ビル3F
札幌支部　011(241)4938
〒060　北海道札幌市中央区北2条西2丁目19-1 チサンホテル本館2F
京都支部　075(371)3759
〒600　京都府京都市下京区堀川通り松原上ル五軒町384 松本ビル2F
仙台支部　022(268)3904
〒982　宮城県仙台市若林区河原町1-4-20 十全会ビル2F
金沢支部　0762(51)8457
〒920　石川県金沢市京町25-20 ソフトオフィスビル2+4 2F
高知支部　0888(84)8286
〒780　高知県高知市はりまや町2-8-8 安藤ビル2F
広島支部　082(264)6250
〒732　広島県広島市南区西蟹屋4-4-18 和田ビル3F
横浜支部　045(243)8079
〒231　神奈川県横浜市中区若葉町3-41-2 コスモ伊勢崎長者町ビル204
和歌山支部　0734(24)2859
〒640　和歌山県和歌山市駿河町42 和歌山酒販会館2F
水戸支部　0292(26)8044
〒310　茨城県水戸市中央2-2-1 HDビル6F
船橋支部　0474(66)4965
〒274　千葉県船橋市新高根6-26-18
埼玉出張所　0485(74)6205
〒366　埼玉県深谷市萱場441-8
布施精舎　03 (3476) 5065
〒150　東京都渋谷区道玄坂1-15-3　プリメーラ道玄坂317号
〈海外支部〉
ニューヨーク支部　212(421)3687
8 East 48th St. #2E (2nd Floor), New York, N.Y. 10017 U.S.A.
ボン支部　(0228)616647
Auf dem Hugel 48, Endenich, 5300 Bonn 1, S.R.Germany

「宗教には興味があるけど、でも、ちょっと……」
そんなあなたに贈る最高のプレゼント！

『えんじょい・はぴねす』の定期購読を申し込まれた方は、様々な特典が受けられる〝EH会員〟になることができます。EH会員は信徒ではありませんが、自由にオウムのイベントに参加できる権利を持ついわば特別会員です。お気軽にオウムをのぞいてみませんか？



特典の一部を紹介すると……

◉オウム主催のイベント、説法会等へ自由に参加可。
◉国外及び海外の本支部道場をいつでも利用可。
◉幸福情報を満載したEH会員手帳をもれなくプレゼント！
◉成就者との対面および電話による悩み相談。

〝えんじょい・はぴねすの会〟会員（EH会員）になるには？

※入会金無料。月刊『えんじょい・はぴねす』の定期購読を申込み、料金の払い込みが確認されるとEH会員となります。
なお、定期購読の申込みは6カ月単位で郵送料込み6000円です。

※詳しくはお近くのオウム真理教道場までお問い合わせください。

古くから伝わる仏典やヨーガ教典によれば、聖者と呼ばれる人々は、このの世のすべてを知り尽くし、心は常に安定し、望めばかなわぬことがないという、いわゆる〝神〟のような存在であったという。しかし、彼らとて最初からスーパーマンであったわけではない。〝長く厳しい修行の後、これらの力を得た……〟と教典は語っている。

すべてを知り尽くした最終解脱者、麻原彰晃尊師が、数多くの技法の中から、忙しい現代人に最も適した修行法を厳選し、あなたの内側に秘められた素晴らしい力を、早く、しかも確実・安全に引き出してくれる！

◆

※資料請求について
資料請求券を貼付したハガキ、または電話にて最寄りの本・支部までご連絡ください。入信案内等詳しい資料をお送りいたします。

キリトリ線

超越神力 PART1
資料請求券

新しい〝あなた〟との出会い

オウム真理教

二千五百年の時を経て甦った真理がここにある！



もっと明晰な頭脳があれば……
もっと記憶力があれば……
もっと集中力があれば……
わたしたちが願ってやまない潜在能力開発の夢を、
オウム真理教は独自の「仏教・ヨーガ」メソッドによって
あなたに贈ります。



超越神力PART1（天耳通・他心通）
——あなたの持っている本当の力

一九九一年十月十二日　初版発行

定価　九八〇円
著者　麻原彰晃
発行者　松本知子
　　　　石井久子
編集　オウム出版広報編集部
発行所　株式会社オウム
東京都世田谷区世田谷二―八―一七
郵便番号　一五四
電話　〇三（三四三九）六〇四三
振替　東京二―一〇九三二五

ISBN4 - 900497 - 51 - 7　C0014　P980E

超越神力

PART—1

天耳通・他心通



麻原彰晃

ISBN4-900497-51-7 C0014 P980E 定価980円(本体951円)